



幕末維新史料展

福井藩その活動の記録

福井市立郷土歴史博物館

1
2

昭和六十年度秋季特別展

幕末維新史料展

—— 福井藩その活動の記録 ——

解説総目録

はじめに

当福井市立郷土歴史博物館の主力収蔵史料である「福井市春嶽公記念文庫」は、わが国屈指の幕末維新史料群として知られ、家門筆頭の立場にあった福井藩の動向を知る上で、極めて重要であります。

このため当館では、様々な展示や出版・講座等を企画し、それら貴重史料を順次公開して、その紹介につとめておりますが、本年度は「幕末維新史料展―福井藩その活動の記録―」と題する秋季特別展を展開する運びとなりました。

本展は、幕末第一の明君、松平春嶽公を中心とする福井藩が、激動の時流に何をめざし、如何に対処したかを政治思想の観点からとらえ、右記収蔵史料を中心に展開するもので、春嶽公の事蹟に従って五時代に区分し、それぞれに簡単な解説を掲げました。

これにより、福井藩のめざしたものが何であったかを、御理解いただければ幸甚の至りでございます。

末筆ながら、本展のため貴重な御所蔵品を快く御出品下さいました各位に対し、篤く御礼申し上げますと共に、今後とも当館の発展のため、皆様からの御支援を心より御願ひ申し上げます。

昭和六十年十月

福井市立郷土歴史博物館

凡 例

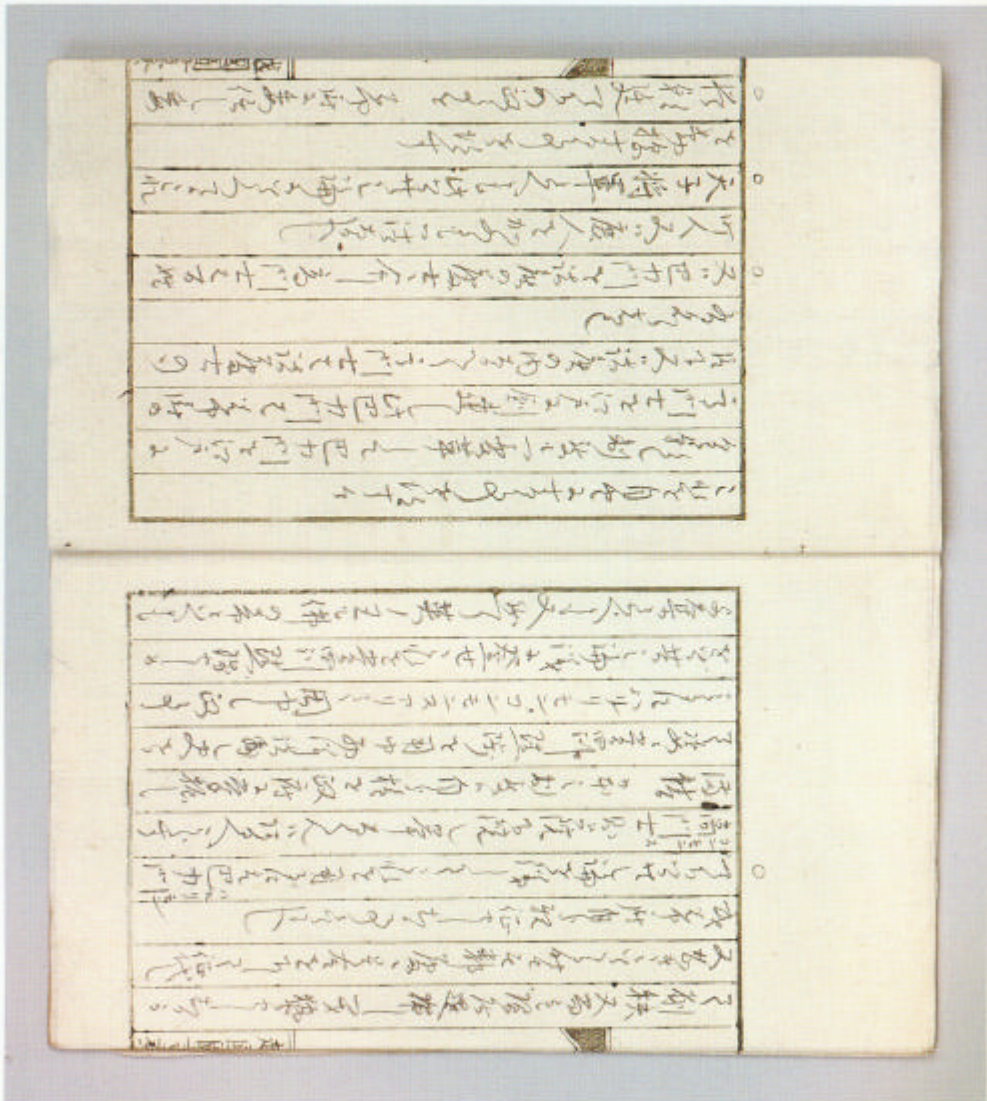
一、本書は昭和六十年十月一日より十一月三日までを会期とする、昭和六十年年度秋季特別展「幕末維新史料展―福井藩その活動の記録―」の解説総目録である。

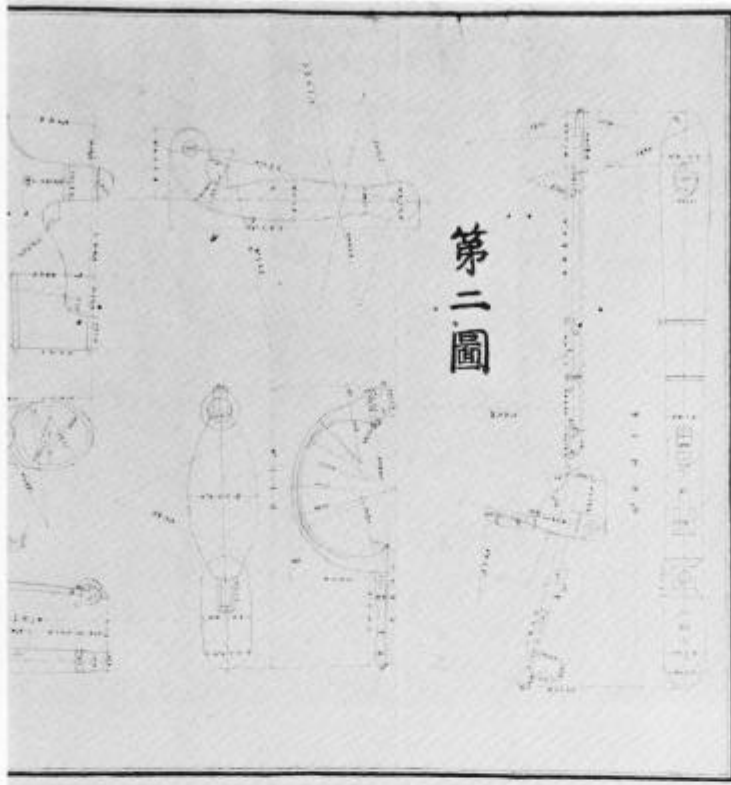
一、収録資料は、幕末の福井藩を導いた松平春嶽公の事蹟に従って「最初の国事奔走期」「隠居謹慎の時期」「政事総裁職在任の時期」「京都における活動の時期」「新政参画の時期」の五期に分類し、解説してある。図版の部分には、いちいちその五期の項目を標記していないが、この分類の順に掲載してある。

一、後半解説部分の各資料に付した「資料通し番号」は、本目録内の写真に付した番号とすべて一致している。

一、所蔵者の注記は、本館の収蔵品については「福井市春嶽公記念文庫蔵」「越葵文庫蔵」の外、「〇〇市 〇〇〇氏贈」「〇〇市 〇〇〇氏寄託」として寄贈品・寄託品の別を示した。また、今回の特別展に限って諸家より借用した品々については、「〇〇市 〇〇〇氏蔵」と注記してある。

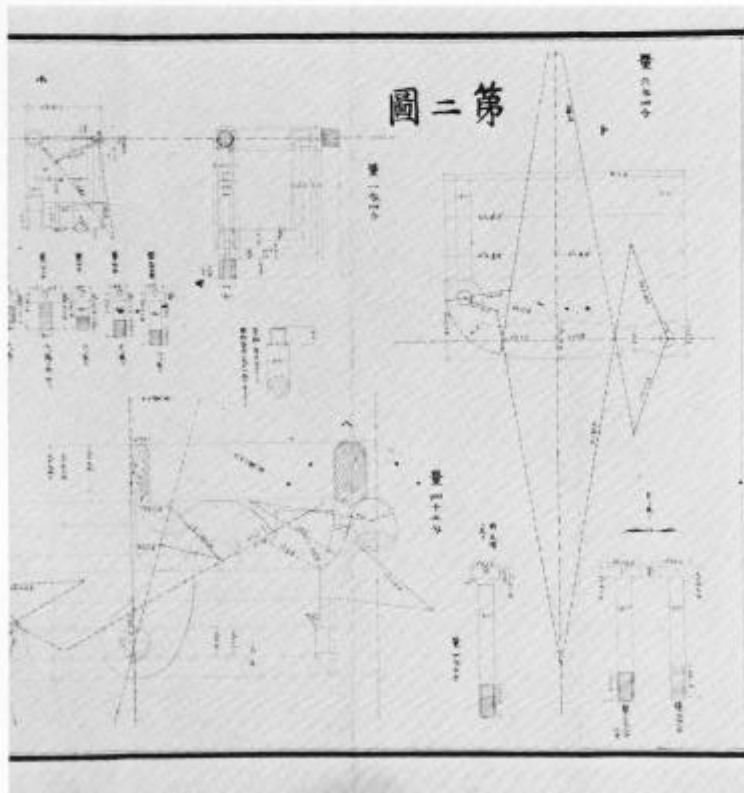
⑨松平春嶽筆「虎豹変革備考」





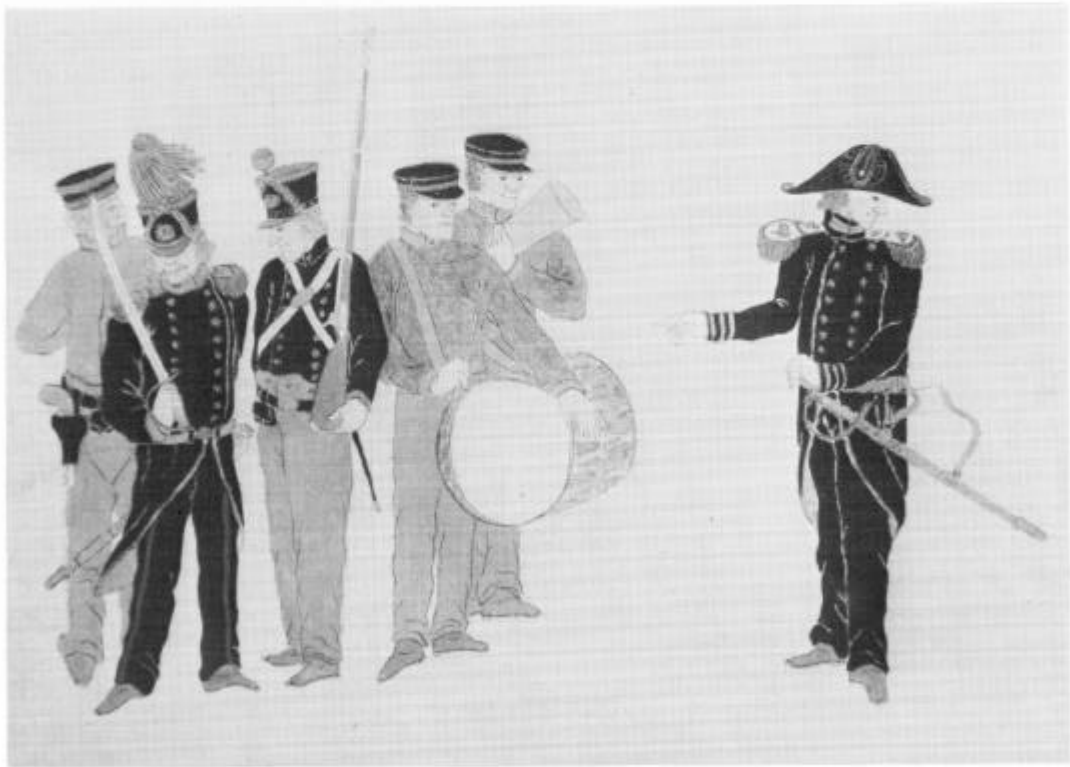
③ 佐々木長淳筆写

和蘭歩隊銃設計図(部分)

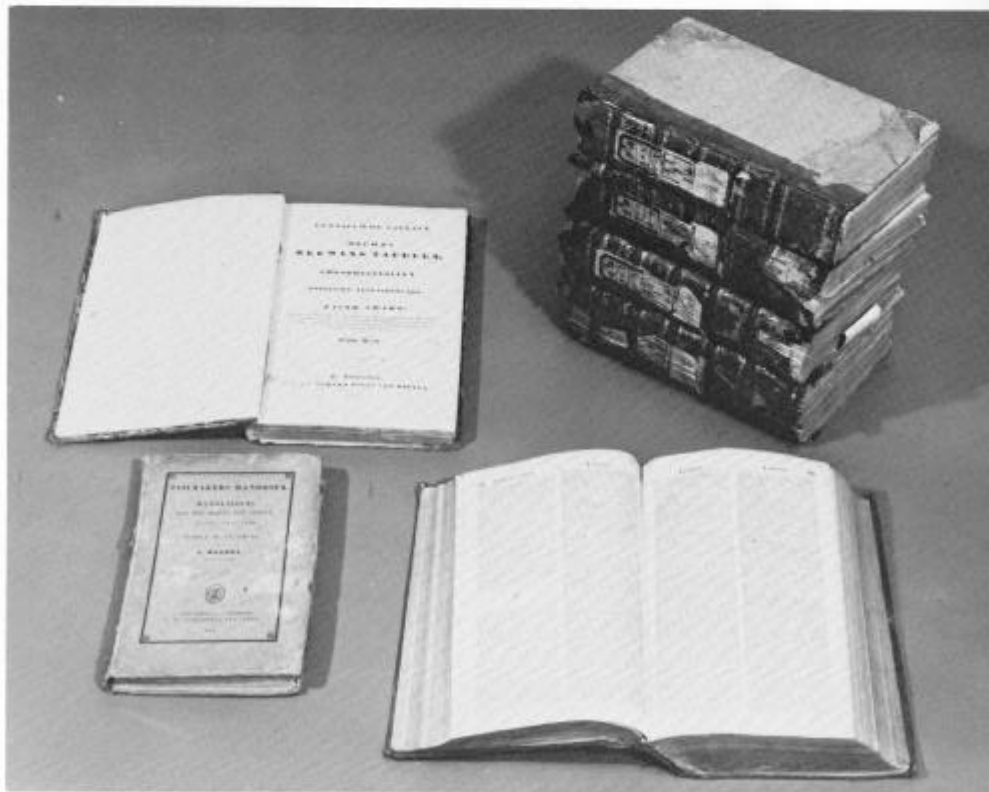
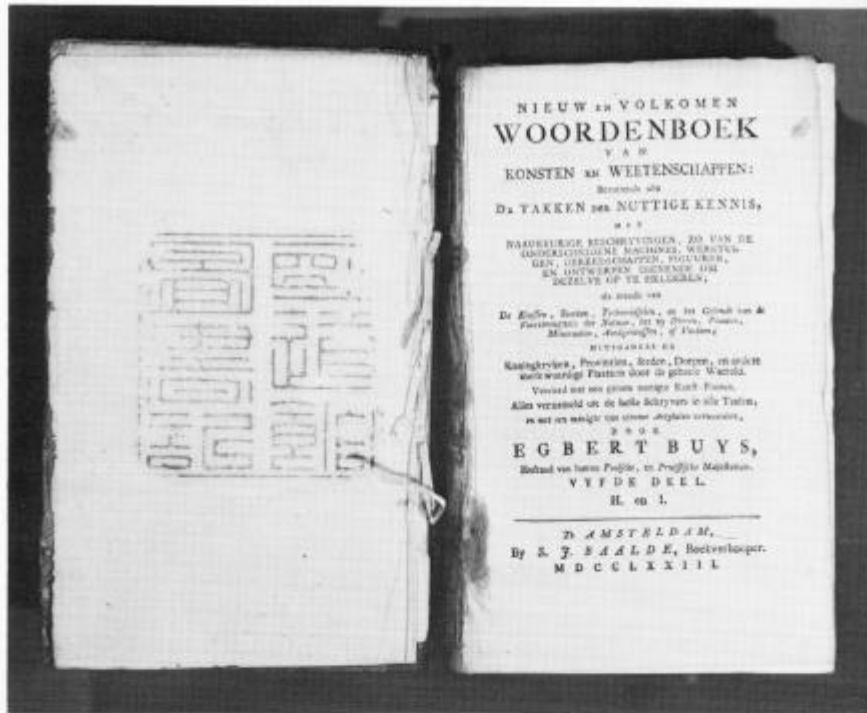


③ 佐々木長淳筆写

和蘭歩隊銃設計図(部分)



④松平春嶽筆・撰「合同船入相秘記」



⑦藩校明道館旧蔵和蘭図書

Handwritten text in vertical columns, likely a page from a manuscript. The text is dense and written in a cursive style. The right edge of the page shows some faint markings, possibly a page number or date.

Handwritten text in vertical columns, likely a page from a manuscript. The text is dense and written in a cursive style. At the top of the page, there is a prominent title or heading written in larger characters, which appears to be "聖徳太子" (Prince Shotoku).

⑨橋本景岳書状 村田氏寿短（いわゆる「日露同盟論」の書翰）

②岩瀬忠震筆「海航誰自任云々」の詩幅

海航誰自任只許
碧翁知五州何謂
遠王示一男兒

巖瀬忠震

乃為徳也
皇國之出和也
只之徳約和親
定見之
其已格
武備之
必為柱
其以
其也

①松平春嶽筆「時勢急務策」

橋本景岳・中根雪江朱筆添削



②山内容堂書状 松平春嶽宛



③躍鯉模様蒔絵硯箱

追思韓子拘幽操
 芝子重然喜恨恩
 今夜其心可罰經
 寸諫多氣為銘紳

出函己年以庚子七月
 古也於麓編
 滿之南定燈云

春岳

⑧松平春嶽筆 「追思韓子拘幽操云々」の詩幅

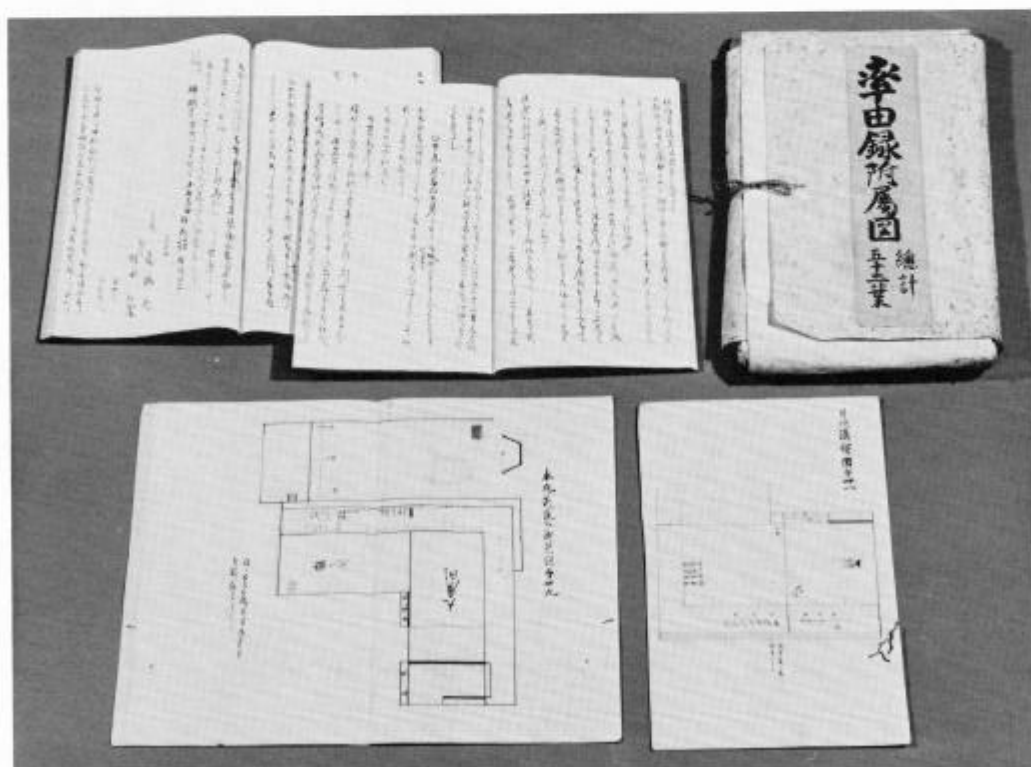
此書乃松平春嶽所書之書狀也。其文曰：予自出陣以來，蒙
 諸公之厚愛，感佩五內。惟是時局艱難，人心離散，予
 一人之力，豈能支此重任乎？然念及先帝之遺訓，以及
 諸公之厚望，不得不勉力從事。今者，事已至此，予
 惟有死而已。然死亦非易事，須俟命於天。此書乃予
 在陣中所書，筆跡蒼勁，氣貫长虹。其文雖多，然其
 精神貫注，一氣呵成。誠為書中極品也。此書現藏於
 橋本景岳宛。

鎮國備後三百年 頑然習手士

⑨長谷部甚平書狀 橋本景岳宛（部分）



⑤松平春嶽手形並に惜別の和歌幅



⑦松平春嶽撰・筆 「率由録」・同付属図

斯道は懐三十年向
 公一日也彼を天に以て
 有者反而雪凡名田幕日也
 車和
 其家光の迹 横井小楠

③横井小楠筆 「斯道在懐云々」の詩幅



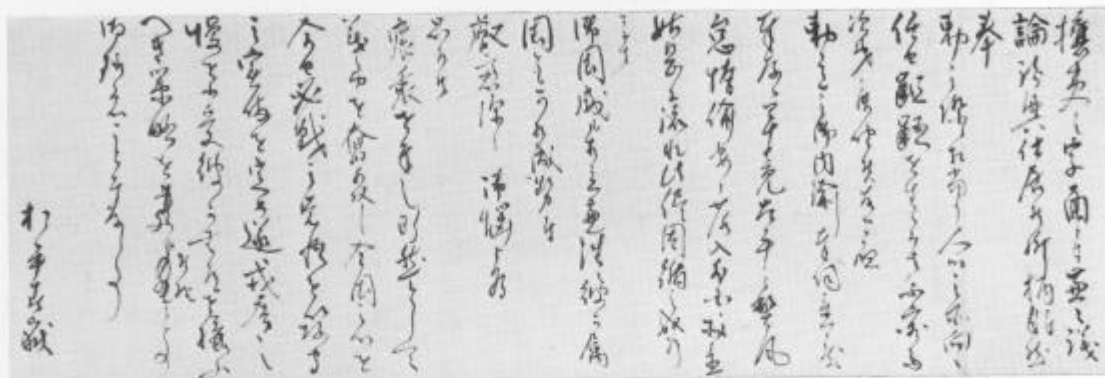
④徳川慶喜筆 日之出梅花図

御寫

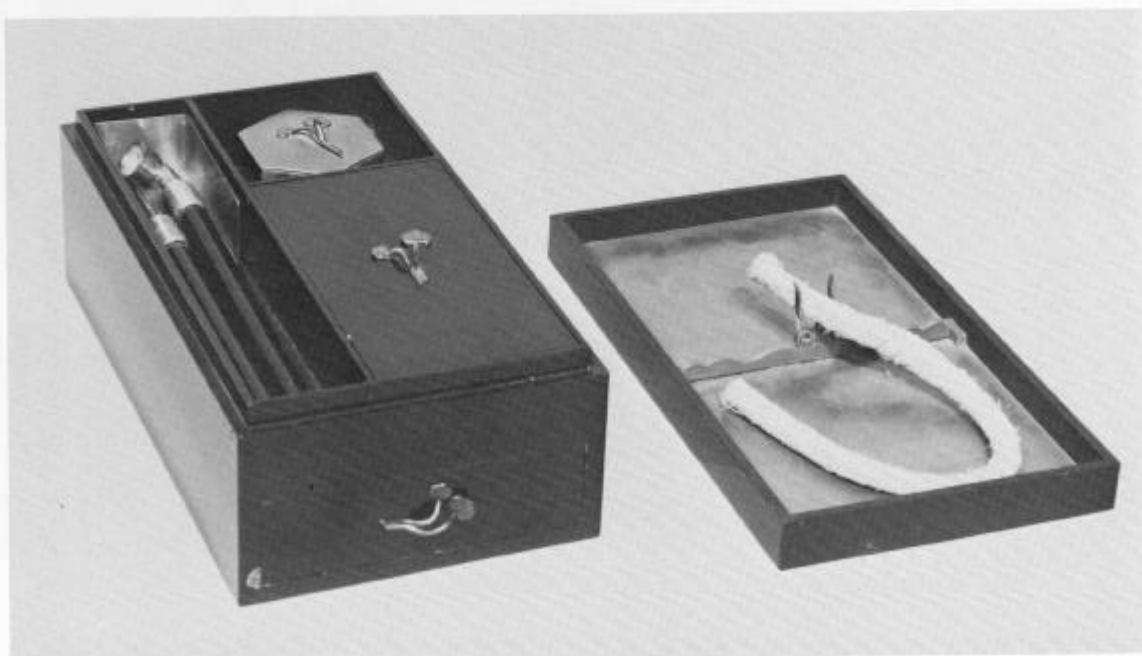
一橋刑部卿ヲ後見トシ
 越前前中將ヲ大老ト
 シテ幕府ヲ扶ケ政事ヲ
 計ラシメハ我輩ノ慢ヲ受
 スシテ衆人ノ望ニ協フヘ
 クト
 思召候事

天保十一年六月二十七日
 正徳二十一年四月御書 松平春嶽

④松平春嶽拜写 勅書御写



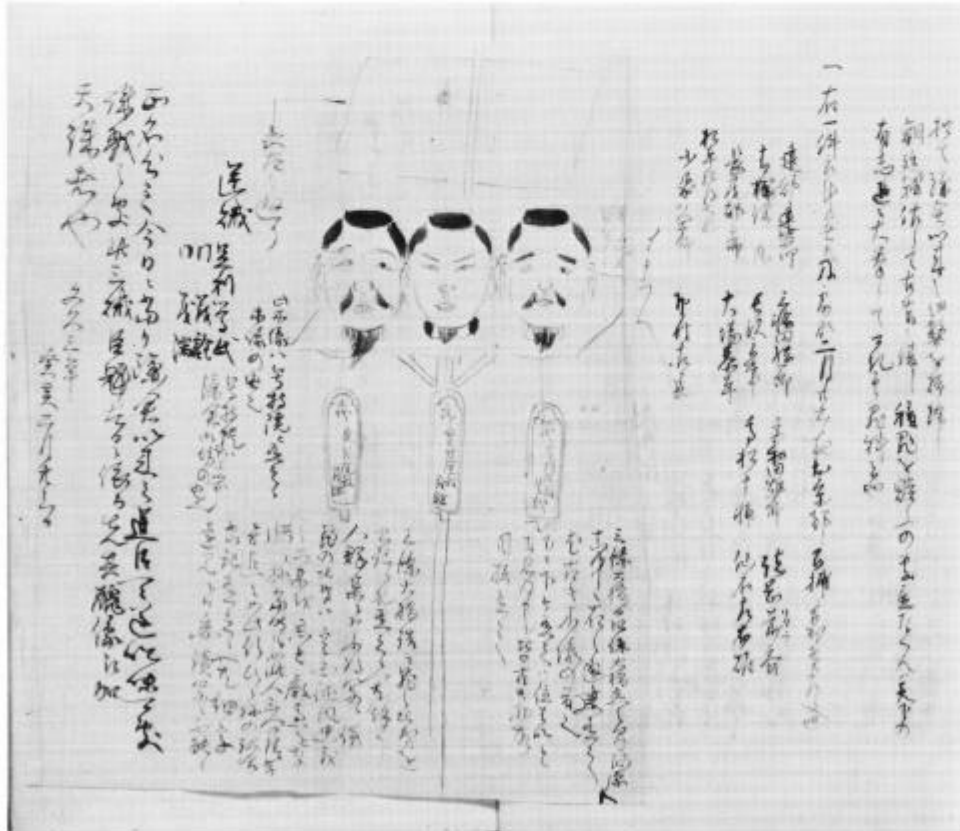
⑤松平春嶽筆 意見書草案



⑦黒蠟色塗携帯用煙草盆



⑤金沃懸地湖畔飛鶴図蒔絵印籠



⑥「文久三亥雜記」

文久元年三月朔日大身
 海日澄波友公在後
 改元一在杉宮

年号折紙

福恒活部

◎元治改元年号折紙

元治元年
 長防征伐畧記
 准通

元治



是ハ氏壽カ 御所ノ塚可御門警
衛ニ候ニ賊輩ト激戦ノ節砲弾^三發
傷セシカ 其中前年ヨリ採取^ス所ノ
彈丸ナリ 今一彈右足ヨリ採取^スルモノ
ハ治療醫ノ莫^クニ所ト為^リ 後日紀念
ノ為メ一言ヲ記ス

明治二十年四月 氏壽

①村田氏寿受傷の彈丸・由緒書



②鈴木準道筆 「長防征伐略記」



⑥山内容堂肖像写真



⑥四老公肖像写真
松平春嶽肖像写真



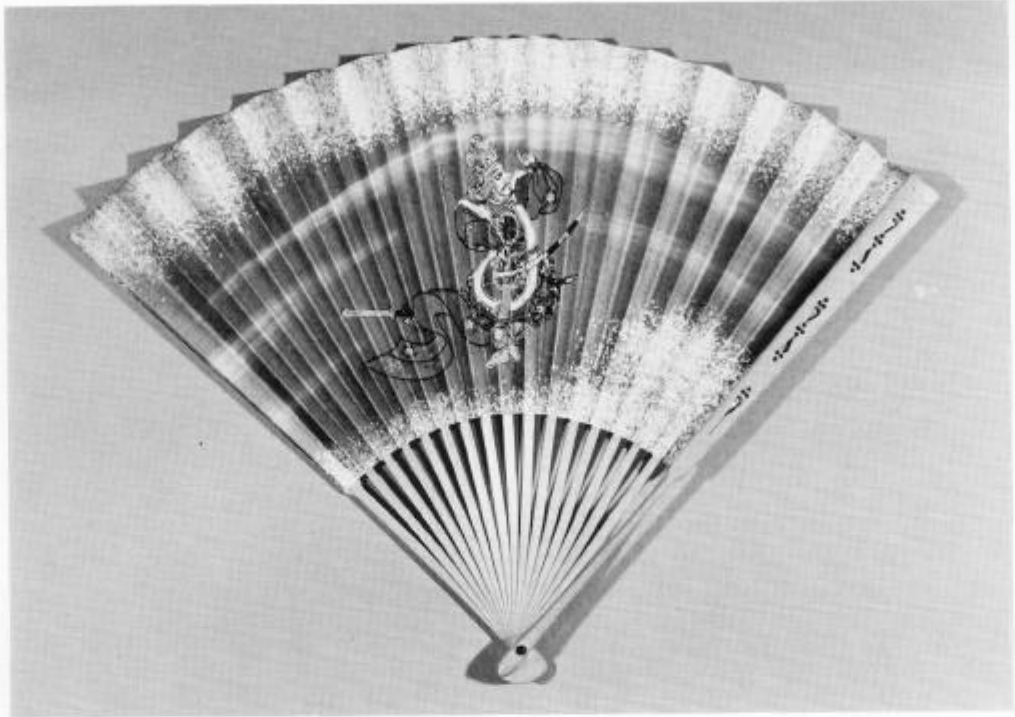
⑤⑤島津久光肖像写真



⑤⑥伊達宗城肖像写真

此寫照慶應三年
五月十四日大樹公召
余與嶋津君輝伊達
子藩松平嚴璋於京師
營中令俱議國事是日
為慰其勞賜酒又出寫
真鏡所俾描四人象者
也故裝以為小屏書其
由於背云春嶽永識

⑤⑦松平春嶽筆 衡立裏書



⑥泉春園筆 雅楽図の扇子



⑧土佐備前守筆 支那武人図の扇子



⑦ 岩倉具視書狀 松平春嶽宛

三石の御
歳末成
先ギボ
まふま
まふま
孫の御
清之御

う那御
の御
まふま
まふま
まふま
まふま
まふま

まふま
まふま
まふま
まふま
まふま
まふま
まふま

②松平春嶽書状 松平茂昭宛（慶応3年12月）11日付

萬國新聞紙第一

英國教師ヘーリー先生論
 前集小日本商人二人の不正なる事件を出し諸
 人の報告きりし是亦懲戒の意あり後當港の
 在漸々外國人皆受約不正の者を此新聞紙に
 かへ出して其罪を顕はさんといふ
 方今日本に於て茶園庭圃を操練せしむる因
 て今爰に施條鏡但茶園直中法を茶を示すのみ
 遠き距離のしを以て新發明施條鏡の遠き

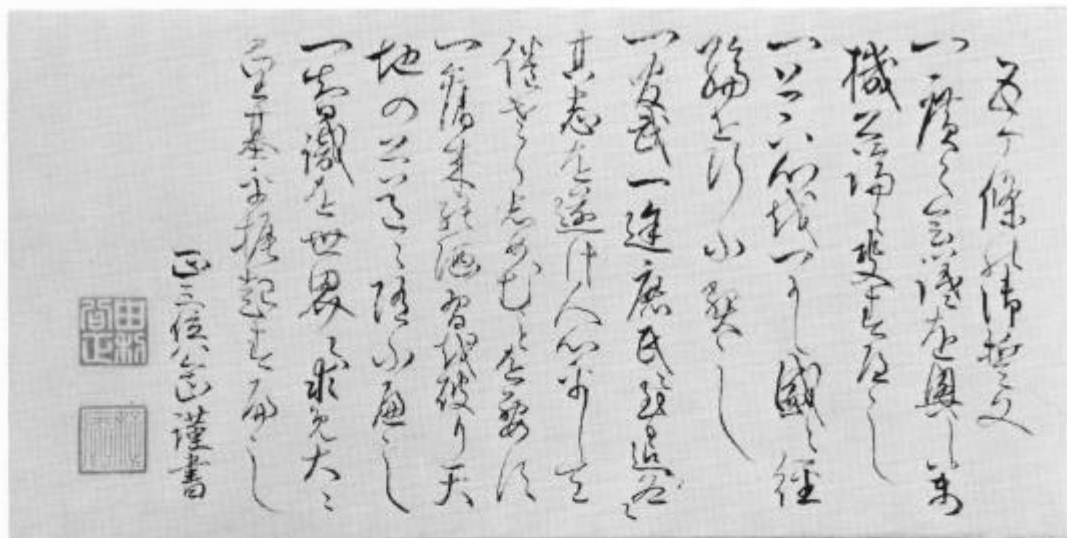
○ 第五月十八日 我四月廿八日 西五月廿八日 出

神戸新聞 西五月廿八日 出

常地ニ出来セシ堀切ノ不行届テ證入可レ
 近頃美麗ニ造營シタル米國コンシユル銀
 館ノ前面ニアル砂濱ハ斯ノ大雨ノ水害ヲ
 醸セリ其工入堀切コ管シテ分噴ニナリ
 シトルハ社中ノ居館ハ尤モ此水害ヲ受タ
 リ軒下非ニ商店ヘノ通行亦暴流ノ為ニ大
 ニ害セラレタリ是日本人ノ建築ノ術ニ疎



㊦各種新聞



⑦由利公正筆 五ヶ條御誓文の書幅



⑧太政官札

朽屋政助
戊辰北越出
張各所戰爭
校君手書勇付
御賞典之内
永世珍名ナ
年二珍名都合
廿拾名令頒授
事
慶永
茂昭

㊚松平春嶽・同茂昭褒賞状 朽屋政之助宛

Apr. 6 20 1871

À Son Excellence
Lui glorieux Sotte
Matsushima
à Yfeca

松平春嶽利當閣下

Monsieur le Ministre
Je me réjouis de votre lettre et je vous en remercie. En France, la loi de la guerre a été votée et il n'y a plus de question de la paix. Les armées se battent et la victoire est la part de Dieu. Je suis certain que vous ne serez pas en retard sur ce point de l'Union. Les troupes de la France ont toujours été victorieuses et vous ne serez pas en retard sur ce point. Croyez, Monsieur le Ministre, à mon profond respect, de votre très dévoué et fidèle
P. de Lamoignon

此書は春嶽閣下宛に
書かれた書状で、松平春嶽が
同茂昭に宛てて、戊辰の戦い
に際して、御賞典に賜わ
れた御褒賞状を、利當閣下
に送付する旨の書状です。
この書状は、春嶽閣下の
御賞状の内容を、同茂昭に
伝えるための書状です。

㊛ブーセー・ガロー書状 松平春嶽宛

明治己巳孟冬

朝廷賞^願前年之功勞拜

賜世祿感泣之餘恭賦

風雲際會是英雄

王業新成論舊功已擲符得楨

藁笠何圖

恩典及微躬

嗚呼^{さうか}白鳥海峽^{あか}決^{けつ}り

二月のこころ^{こころ}己のほろ^{ほろ}水

雪江中根師賢拜

解

説

解説

第一 最初の国事奔走期（嘉永六年^{一八五三}～安政五年^{一八五八}）

嘉永六年（一八五三）六月三日、米使ペリーの来航を未曾有の国難と受け止めた松平春嶽は、国家の独立自存の重要性を認識して、自ら積極的に国政への参加を開始した。

安政四年（一八五七）以降、積極的な開国通商論を提唱した春嶽も、当初は強硬な攘夷論者で、大規模な国防計画を主張し、そのための経済力確保として、従来隔年の参勤交代制を四年に一度に緩和することなど、さまざまな具体案を進言した。

しかし、時の将軍家定（十三代）は病弱で世嗣もなく、将軍職の重責を果たせない状態にあったから、春嶽は賢明な将軍を頂点として、多難な時局を乗りきらねばならぬと考えた。そのため、英明の誉高く人望あつた一橋慶喜を將軍継嗣として擁立すべく、いわゆる一橋派の中心人物となって、血統論を楯に幼少の紀伊慶福擁立をはかる井伊直弼の南紀派と対立し、激しい政争を展開した。しかも、この政争には外交問題が複雑に絡み合っており、一層深刻なものとなった。

① ^{嘉永}泰平安民鑑 紙本木版

一幅
本館蔵

② 徳川齊昭・松平春嶽往復書状 嘉永六年六月八日付 一通

越葵文庫蔵

安政四年（一八五七）以降、積極的な開国通商論を提唱した松平春嶽も、それまでは強硬な攘夷論者であった。そのた

め、嘉永六年（一八五三）六月三日、浦賀に米使ペリーが来航した際、幕府の優柔な態度に憤慨し、かねて尊敬する水戸の徳川齊昭に、具体的な攘夷の方策について自論を披瀝し、意見を求める書状を發した。齊昭は、即座にこれに応えるため、朱筆をもって春嶽の書状の余白に意見をしたため返信したのが、これである。

この書翰の日付は、ペリー来航六日めの六月八日で、福井藩兵が品川御殿山警備に出動した翌日にあたり、緊迫感が行間にあふれている。

③ 佐々木長淳筆写 ^{複製}和蘭歩隊銃設計図（安政元年）

松平文庫（^{松平宗紀氏蔵}福井県立図書館保管）
六枚 ^{複製}

米使ペリーの来航に先立ち、福井藩では洋式砲術及び洋式訓練の採用に踏切り、従来の弓組や長柄槍組を鉄砲組に編成替するなど、着々と軍備・軍制の近代化をはかった。

しかし、これには大量の洋式銃器の製造が必要であったから、嘉永六年（一八五三）九月、江戸霊岸島の藩邸内に製銃工場を設け、自藩に於ける洋式小銃の生産を開始した。翌安政元年（一八五四）、その製銃工場を福井御泉水邸内に移しさらに安政四年（一八五七）、城下志比口に銃砲製造所、吉田郡松岡に火薬製造所を建設して増産をはかり、明治初年製造所閉鎖までに約七千挺の小銃を製造した。

この和蘭歩隊銃設計図は、「製造局御用品ノ内大砲小銃絵図類中抜萃 佐々木権六」と表書のある紙袋にまとめられた小銃・大砲の設計図二十七枚中の六枚で、藩の製造局頭取などを勤めた佐々木長淳（権六）の筆写によるものである。

〔佐々木長淳〕

福井藩士佐々木長恭の長男として天保元年（一八三〇）に生まれる。通称は権六。嘉永六年（一八五三）家督を相続し藩命によって洋式兵学を修業した。

福井藩の製造局頭取などを勤め、洋式銃砲の大量生産や、藩最初の洋式船「一番丸」を建造するなど、造船・機械工学の分野ですぐれた業績を収めた。造船や銃器製造には、詳細な図面がつきものであるから、長淳はその職務上、多くの設計図を描き、それが今日に伝えられている。慶応三年（一八六七）藩命で米国へ渡り、兵器や紡織機を研究、その購入交渉に当った。廃藩後は東京へ移住し、工部省へ出仕して紡績事業の興隆に努力するとともに、郷里福井の産業振興にも力を注ぎ、織維王国福井の基礎を築いた。大正五年（一九一六）八十七歳で歿す。

④松平春嶽撰・筆『合同舶入相秘記』

六冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

嘉永七年（安政元、一八五四）正月、米使ペリーの再渡来を未曾有の国難と受けとめた松平春嶽が、米艦の動静、応接の様、自藩の品川御殿山警固の状況などについて、詳細に記録したものである。ほとんど春嶽の自筆であるが、部分的に家臣の筆写による箇所も含まれている。

なお、書名中の「合同舶」とは、アメリカ合衆国の船舶の意また、「入相」とは相模湾に侵入の意味である。

⑤ペルリー関係史料 来航米人似顔絵・諸大名相模湾警固配置
図

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

嘉永七年（安政元、一八五四）正月のペリー再渡来に際して作成された絵図である。上段は、来航米人の中の上級士官アワタムス（アダムスカ）と、その子息の肖像画で、

嘉永七甲寅年正月、浦賀表江渡来北アメリカ州合衆国船ノ三番目将ノ図

今般渡来異人之内、三番目之大将アワタムスト申者之由、
今吾人者 同人忝ニ而、至而、美男之由。年齢式拾才位、
名前不知。

と書込みがある。

下段の二枚は、相模湾の警固状況、諸家の配備を図示したものである。

⑥松平春嶽筆「孔子神位」の書幅

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸時代は儒学の全盛期であったから、儒学の祖孔子を尊信することも盛んで、全国各地の学問の場では孔子が祀られた。

安政二年（一八五五）春、早くから文武を奨励した松平春嶽は、学政一致の立場から藩校明道館の創立を発令し、翌三年には橋本景岳を起用して、内容の充実をはかった。この書幅は、その明道館開館にあたり、心身を清浄にした二十八歳の春嶽が謹書し、藩校の講堂に安置したものである。当時春嶽の小姓を勤めた武田正規が、安政二年六月二十四日の開館式当日、これを講堂の床の間に祀って神酒を供え、一同厳肅に礼拝した旨を記した由緒書付が付属している。

⑦藩校明道館旧蔵和蘭図書

七冊
福井市立図書館蔵

- (1) NIEUW EN VOLKOMEN WOORDENBOEK VAN
KONSTEN EN WETENSCHAPPEN E. BUYS MDCCCL
XXI 蔵書印「明道館図書記」 四冊
(2) ZEILMAKERS HANDBOEK OF HANDLEIDING TOT
HET MAKEN VAN ZEILEN J. MODERA 1846 蔵書
印「明道館図書記」 和文書名『モペラ 制帆書』 一冊
(3) GRONDBEGINSELEN DER DADELJKE ZEEVAARTK
UNDE J. SWART 1853 蔵書印「越国文庫」
「図書寮」 和文書名『スワルト 実修航海原始』 一冊
(4) WOORDENBOKE DER GEHELE AARDE DOOR J.
KRAMERS JZ. 1855 蔵書印「越国文庫」
「図書寮」 和文書名『クラメルス氏 世界地理字典』 一冊

⑧橋本景岳筆 洋書習学所設立に関する布令草稿 安政四年四
月頃 自筆筆記帳より 一点

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政四年（一八五六）正月、藩校明道館の学監同様心得に
任せられた橋本景岳は、自藩の教育を激動の時代に即したも
のとするため、教官の旧幣を激しく批判しつつ、実用に主眼
を置いた教育改革策を、次々と断行した。

ことに、同年四月、景岳の建議で明道館に洋書習学所が付
設されることとなったが、これは景岳が断行した教育改革の
中で、第一に特筆すべき業績であった。

この布令草稿は、洋学不信を唱える明道館教官らに、洋学
導入の意義と、その教育上の留意点を説いたもので、洋学の

先進性と優秀性に心を奪われ、安易な外国崇拜に陥ることを
最も戒めている。

〔橋本景岳〕

天保五年（一八三四）福井藩医の家に生まれ、十六歳で大
阪緒方洪庵の適塾に入門、二十一歳の時、江戸に遊学、坪井
信良、杉田成卿の教えを受け、早くより英才の聞えが高かつ
た。

藩主松平春嶽（慶永）に、その学才と識見を認められ、安
政二年（一八五五）二十二歳で医員を免ぜられ、藩政に参与
し、藩内の教育改革に尽力した。

將軍継嗣問題が起るや春嶽のもと一橋慶喜を擁立すべく、
京都、江戸に活躍、大いにその抱負を行なわんとしたが、安
政五年（一八五八）「安政の大獄」に捕えられ、翌六年十月
二十六歳で斬に処せられた。

⑨中根雪江書状 安政四年七月十日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸にあった中根雪江が、国許で藩校明道館の経営に従事
する橋本景岳に宛てた書状である。書中、米使ハリスの將軍
拜謁が本決りとなったことを知らせ、

段々苦々敷事に相成り申候。此上は顔色形容飽まで還ま
しく、古金買に見せ候ても、征夷大將軍と申顔付の男を
日本中に尋ね出し、御上壇に居へ置申度候。拙策は是よ
り外には無^レ之候。

と報じて、米使を睥睨する威厳に乏しい家定將軍の替玉でも
捜さんかと歎息している。この時期、主君松平春嶽も同じ事
を真剣に憂慮し、幕閣へ進言までしているが、雪江は誰より

も主君の心思に通曉し、絶えずその意を体して行動した。

〔中根雪江〕

文化四年（一八〇七）、福井藩士中根衆譜の長男として生まれる。名は師質、通称靱負、雪江と号した。国学に志をいだき、天保九年（一八三八）江戸詰となった機会に平田篤胤の門人となった。

弘化年間（一八四四～四七）松平春嶽に抜擢されて側用人となり、藩政改革を強力に推進した。嘉永六年（一八五三）ペリー来航を契機に、春嶽を助けて幕末の政局に参画し、一橋慶喜擁立や公武合体運動を画策推進した。王政復古後、新政府の参与となったが、間もなく辞任、福井に閑居した。

幕末における松平春嶽の事蹟を中心とする福井藩の活動を公正な筆致で記録し、『昨夢紀事』『再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』などを著わした。いずれも幕末維新史の重要史料となっている。明治十年（一八七七）、七十一歳で歿した。

⑩ 橋本景岳書状 安政四年十月二十一日付 村田氏寿宛 「景

岳君書翰録」所収

福井市春嶽公記念文庫蔵

一通

江戸に赴任した橋本景岳から福井の村田氏寿に宛てた書状である。この日、江戸城に登城した駐日総領事ハリスのことや、將軍継嗣問題をめぐる自藩の活動等を報知している。

特にこの時期、水戸齊昭と不和の関係にあった信州上田藩主松平伊賀守忠固が、老中に再任されたことから（九月十三日）、齊昭の実子一橋慶喜を將軍継嗣に擁立すべく努力していた松平春嶽等は、それより中根雪江を中心に、春嶽と伊賀守との初会合を実現すべく必死の活動を展開した。

〔村田氏寿〕

文政四年（一八二一）福井藩士村田氏英の長男として福井城下に生まれる。幼名は巳三郎。

安政三年（一八五六）橋本景岳と共に藩校明道館に出仕し、のち幹事となる。翌四年藩主松平春嶽の命により横井小楠招へいの下交渉に熊本へ赴く。元治元年（一八六四）七月、蛤御門の変が起った時、藩兵を率いて堺町御門を警備したが、長州軍の砲弾によって重傷を負った。更に慶応四年（一八六八）六月、会津征伐に際しては藩兵を率いて越後に出陣し、若松城落城後は、同地方の民政安定に努力し、以後藩の参政職、版籍奉還後は藩知事松平茂昭を補佐し、福井藩権大参事心得・福井藩大参事となり、廃藩置県断行後、福井県参事、更に岐阜県権令に栄転、明治十年（一八七七）退官。同三十二年（一八九九）五月、七十九歳で歿した。

⑪ 田宮弥太郎書状 安政四年十一月十三日付 橋本景岳宛

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔田宮弥太郎〕

尾張藩士。名は篤輝、通称弥太郎、如雲・桂園などと号した。藩政の中枢に参画し、人材登用・儉約政策に力を注ぎ、藩内尊攘派の長老格として、藩主慶勝を補佐した。

將軍継嗣問題では、一橋慶喜を推す主君を助け、種々奔走したから、安政の大獄に連座し幽閉に処せられた。ゆるされた後、藩内の士気振興につとめ、元治元年（一八六四）慶勝が総督に任せられた第一次長州征討を指導した。維新後、新政府の参与、さらに藩の大参事として諸政改革に手腕をふる

い、明治四年六十四歳で歿した。

⑫橋本景岳書状 安政四年十一月二十八日付 村田氏寿宛

(いわゆる「日露同盟論」の書翰)

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政四年(一八五七)八月以降、江戸にあって主君松平春嶽を助け、対米条約勅許をめぐる外交問題と、將軍後継者決定という、内外二大案件解決のため必死の活動を展開していた橋本景岳が、その抱懐する外交策と、国内体制改革策を、国許の村田氏寿に、余すところなく論じたものである。

当時一級の学力を有していた景岳ならではの確な世界情勢の分析や、日本国中を一家とみなし、世界の中の日本という立場を自覚した気宇の壮大さには、驚歎感動せざるを得ない。

⑬佐々木長淳書状 安政五年正月三日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井から江戸の橋本景岳に宛てた書状である。新春の賀詞を述べた上で、製造局頭取として自分が中心に建造をすすめている洋式船が、夏頃には完成すること、また福井志比口の藩製造所の現況等を報告している。製造所の動力として水力を利用する目算が立ったことを記していて、興味深い。

⑭島津齊彬書状写 安政五年正月六日付 近衛忠熙・三條実万宛

二通

福井市春嶽公記念文庫蔵

松平春嶽らと結んで一橋派の支柱となり、幕政改革を企図

した薩摩藩主島津齊彬が、左大臣近衛忠熙・内大臣三條実万に宛てた書状の写で、一橋慶喜を將軍の後継ぎにすることの急務を説き、内勅を幕府に降下させるよう強く働きかけている。

(島津齊彬)

文化六年(一八〇九)薩摩藩主島津齊興の長男として生まれた。名は齊彬、忠方・邦丸・又三郎などと称し、雅敬・麟洲と号した。幼年より英明の聞えが高く、将来を囑望されたが、父齊興は、妾腹の三男久光を溺愛したため、藩内に継嗣問題が起き、齊彬派は処分された(高崎崩れ)。齊彬が藩主に就任したのは、嘉永四年(一八五一)四十三歳の時であった。

齊彬は、早くよりヨーロッパ文明を輸入し、洋書の翻訳・軍備の拡張・蒸気船の建造など、新時代に即した藩政改革を推進した。將軍継嗣問題では、水戸の徳川齊昭・松平春嶽・伊達宗城らと共に一橋慶喜擁立運動を展開し、西郷隆盛を登用して橋本景岳と常に緊密な連絡をとらせた。また齊彬は、教育者としても知られ、安政四年(一八五七)、造士館・演武館に下した十ヶ条におよぶ訓は、齊彬の高邁な教育理念を示すものとして、高く評価されている。安政五年(一八五八)七月、藩主就任後七年で急逝した。享年五十歳。

(近衛忠熙)

文化五年(一八〇八)七月、前左大臣近衛基前を父に、徳川(尾張)宗睦の女静子を母として、京都に生まれた。名は忠熙、翠山と号した。文化十三年(一八一六)加冠して昇殿を許され、従五位上右近衛権少将を振出に、権中納言・内大臣(十七歳)・右大臣を歴任、安政四年(一八五七)、左大臣に昇進した。翌年條約勅許問題・將軍継嗣問題が起ると朝

威の伸長を謀り、関白九条尚忠が親幕に傾くのを牽制した。また姻戚関係にある島津家に協力し、島津齊彬の宮廷入説に尽力したが、安政六年（一八五九）三月、安政の大獄に坐して左大臣を辞し、落飾して幽居した。三年後の文久二年（一八六二）、復飾して関白・国事御用掛となったが、公武合体系方針をとったため、翌年関白を辞し、ついで国事御用掛も免ぜられた。以後、政治的にはほとんど活動せず、明治六年（一八七三）隠居、同三十一年、九十一歳で歿した。

〔三條実万〕

享和二年（一八〇二）二月十五日、内大臣三條公修の子として京都に生まれ、「今天神」とその英明さを噂された。

文化九年（一八一二）元服して右近衛権少将となり、ついで権大納言・議奏・武家伝奏を経て、安政四年（一八五七）内大臣に任ぜられたが、翌年辞任した。その間、おもに学習所の創設、堂上子弟の道徳教育、公家の貧窮救済に尽力した。條約勅許問題・將軍継嗣問題では、勅許反対の立場に立ち松平春嶽・山内容堂・島津齊彬らと接触して一橋慶喜の擁立を援けるなど、佐幕派の関白九条尚忠と対立した。安政の大獄により洛南上津屋村に隠退し、落飾謹慎の処分を受け洛北一乗寺村で病歿した。享年五十八歳。

明治三十二年（一八九九）正一位を贈られ、同十八年、別格官幣社梨木神社の祭神として奉祀された。

⑮西郷隆盛書状 安政五年正月十九日付 橋本景岳宛 一通

越葵文庫蔵

橋本景岳・西郷隆盛両者が、家定將軍夫人篤姫（島津齊彬養女）を動かして、將軍継嗣問題を有利に展開しようとして

いた時期の書状である。

〔西郷隆盛〕

薩摩藩士。通称吉之助、南洲と号した。安政元年（一八五四）藩主島津齊彬に才能を見いだされ、その近臣となる。当時、水戸・越前・薩摩・土佐などの諸藩主は、一橋慶喜を將軍後継者に擁立し、幕政改革をめざして結束した。隆盛は齊彬の命をうけ東奔西走したが、反対派の井伊直弼らに敗れ、その弾圧をさけて薩摩にのがれた。その後第一次長州征伐には征長派の有力な謀将として活躍したが、第二次征長戦に際し、土佐の坂本龍馬の斡旋により長州藩の桂小五郎らと、ひそかに薩長連合を結び、藩論を出兵拒否に定めて、以後討幕運動を推進した。

王政復古後、征東軍大総督参謀となって東下、勝海舟と会談して江戸の無血開城に努力した。さらに政府首脳として陸軍大将などの要職をつとめたが、征韓論をめぐる大久保利通・岩倉具視らと対立、明治十年（一八七七）に至って西南戦争をおこしたが、政府軍に敗退し、五十一歳で自刃した。

⑯橋本景岳筆 三條実万への呈書控 安政五年二月中旬 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政五年（一八五八）二月より四月にかけて、桃井伊織と変名し京都での活動を展開していた橋本景岳は、一橋派に好意的であった内大臣三條実万に對面して、説得にあたった。

景岳の議論に感動した実万は、その内容を書面にして提出するよう命じた。この史料は、その際景岳が実万に呈した書面の控（草稿）で、この中で景岳は、わが国の歴史・伝統と現状、そして西欧の歴史と現況について詳しく説明し、開国通

商の必要と国内体制の改革が緊急の課題であることを、切々と論じている。

⑰幕府大奥御臺所附の老女生嶋より薩摩藩邸への密書 安政五年二月二十七日付 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

大奥方面への運動として、家定將軍夫人篤姫（島津齊彬養女）を動かして、將軍継嗣問題を有利に展開しようとしていた時期の密書で、一橋派に不利な状況にある大奥の様子について、詳しく報知している。

⑱松平春嶽書状 安政五年三月十八日付 三国幽眠宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸にあった松平春嶽が、京都の三国幽眠に宛てた書状である。幽眠は鷹司家の儒者で、越前三国の出身であった。一橋派に賛成し、橋本景岳を公卿間に紹介するなど、京都での活動に協力した。

〔三国幽眠〕

越前三国出身。通称を与吉郎・大学といい、幽眠と号した。幼くして彦根藩儒中川漁村（六郎）に師事し、さらに京都へ出て、摩島松南に学んだ。天保七年（一八三六）塾を開き門弟を養成しながら、『古註孝経』を著し、光格上皇に奉ったのが縁となって、同九年鷹司家の儒者となる。

將軍継嗣問題起るや、一橋派に賛成し、橋本景岳を公卿間に紹介するなど、奔走するところがあった。このため安政の大獄に連座し、追放に処せられた。文久二年（一八六二）許されて京都に帰り、再び鷹司家に仕える。明治二年（一八六九）

議定鷹司輔熙の議事局扶に任ぜられ、同六年教部省が置かれた時、権大講義に補せられた。明治二十九年五月、八十九歳で歿した。

⑲山内容堂筆 「養賢堂」の扁額 一額

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政五年（一八五八）春、土佐藩主山内容堂が松平春嶽に贈った書で、「鯨海酔侯」の署名がある。「養賢堂」は春嶽の号である。

⑳平岡円四郎書状 安政五年五月二十一日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔平岡円四郎〕

旗本の家に生まれ、初め幕府学問所寄宿中頭取となり、のち水戸の藤田東湖の推薦を受けて一橋慶喜の近侍に採用された。將軍継嗣問題おこるや、安島帯刀・橋本景岳・中根雪江らとはかって慶喜擁立に奔走した。安政の大獄で左遷されたが、慶喜の將軍後見役就任とともに再び側近となって政務をたすけた。元治元年（一八六四）側用人番頭、ついで一橋家家老並にすすんだが、同年六月京都で水戸藩士の襲撃を受け四十二歳で斬殺された。

㉑松平春嶽筆 「時勢急務策」 安政五年五月二十二日徳川齊昭宛意見書 橋本景岳・中根雪江朱筆添削 一綴

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政五年（一八五八）五月二十一日、松平春嶽が一夜の内

に書き上げた意見書で、中根雪江・橋本景岳の朱筆添削を経て、翌二十二日朝、徳川齊昭のもとに届けられたものである。

当時、春嶽とこれを補佐する雪江・景岳らは、將軍継嗣問題の解決を、難局打開の根本策として必死の活動を展開していたが、政敵の井伊直弼が、安政五年四月二十三日大老に就任することによって、重大な危機に直面した。これ以後、春嶽を中心とする一橋派有志の間では、直弼を幕閣中から排除する「除奸の策」が真剣に検討されはじめる。

この「時勢急務策」は、そうした状況の中で焦慮する春嶽が、直弼排除の方策を考え、一気に書きつづつて齊昭に示しその意見を問うたものである。しかし、水戸藩との間で一度前後策を協議する必要を感じた雪江や景岳は、主君のはやる心を押えて、この意見書に朱筆をもって大幅な添削を加え一挙に全体の四分の三を抹消した。

夜を徹して書き上げた長文の意見書に、何の顧慮することもなく添削を加えた家臣、それをそのままとして容認した主君、ここには最高の信頼関係によって結ばれた君臣の清々しい態度があふれている。

②②伊達宗城筆 「北風卷頑雲云々」の詩幅

一幅
福井市春嶽公記念文庫蔵

〔伊達宗城〕

伊予宇和島藩主。文政元年（一八一八）に生まれる。幼名亀太郎、知次郎・兵五郎と称し、弄鏃・藍山などと号した。

將軍継嗣問題・対外條約問題で、松平春嶽や山内容堂と協力して活動し、安政五年（一八五八）ともに譴責を受け隠居させられた。その後も公武合体推進のため努力し、維新後議定

・大藏卿・清国への欽差全權大臣等を歴任、明治二十五年歿した。

②③岩瀬忠震筆 「海航誰自任云々」の詩幅

一幅
福井市春嶽公記念文庫蔵

軸裏に、松平春嶽の筆で「岩瀬肥後守眞蹟 橋本左内所呈春嶽賞玩」と書き込みがある。

海航誰か自から任す。只許す碧翁の知るを。
五州何ぞ遠しと謂はん。吾亦一男兒。

蟾州岩瀬震

〔岩瀬忠震〕

名は忠震、修理・肥後守などと称し、蟾洲・鷗処・岐雲と号した。幕末三俊才の一人に数えられる。老中阿部正弘に抜擢されて目付となり、外交・海防事務に従事した。安政四年（一八五七）、日米通商條約交渉の全權となり、米使ハリスをしばしば閉口させて、ハリスをして、「かかる全權を得たりしは、日本の幸福」といわしめた。將軍継嗣問題では松平春嶽・橋本景岳らの主張に賛同し、一橋派として尽力した。井伊直弼の大老就任直後、新設の外国奉行に任ぜられたが、まもなく一橋慶喜を推したことから退けられ免職・蟄居の処分をうけ、文久元年（一八六一）四十四歳で歿した。

②④「三友遺墨」 橋本景岳・安島帯刀・茅ノ根伊予介書状、並に中根雪江筆跋文貼交ぜの幅

一幅
福井市春嶽公記念文庫蔵

中根雪江が、安政の大獄に斃れた三名の同志の書状を集め、文久元年（一八六一）九月藩儒矢島立軒に撰を依頼した跋文

を自らの筆で書添え、一幅に仕立てて秘蔵したものである。「三友」とは、水戸藩家老安島帯刀（弥次郎）・水戸藩士茅根伊予之介・橋本景岳の三名で、いずれも雪江と志を同じくして国事に奔走したが、安政の大獄で非命の最期をとげた。また、その三人を偲ぶため雪江がこの幅に合装した遺墨は、すべて安政五年（一八五八）五・六月頃の雪江宛書状で、將軍継嗣・対米條約締結・幕政改革等の諸問題解決のため、最後の活動を展開していたことに関連する、重要な内容のものばかりである。

⑳ 「三英遺墨」 佐久間象山・水野忠徳・岩瀬忠震書状、並に松平春嶽跋文貼交ぜの幅 一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵
中根雪江が愛蔵した佐久間象山・水野筑後守（忠徳）・岩瀬肥後守（忠震）の書状を、雪江の歿後、その子牛介から贈られた松平春嶽が、自ら跋文を添えて一幅に合装したものである。春嶽の筆で

三英 佐久間象山・水野筑後守忠徳 遺墨 春嶽永雅玩
岩瀬肥後守蔵

と箱書があるように、三英遺墨とは春嶽の命名で、いずれもその名にふさわしい英才の筆跡である。

第二 隠居謹慎の時期（安政五年（一八五八）～文久二年（一八六二））

安政五年（一八五八）四月、南紀派の巨頭井伊直弼が大老に就任し、徳川慶福の將軍継嗣決定を強行したから、松平春嶽の政治活動は完全に失敗し挫折するに至った。反対派に大弾圧（安政大獄）を加えた井伊直弼は、同年七月五日、春嶽を「隠居急度慎」の厳罰に処したほか、一橋派の諸大名に、それぞれ重罰を与え、従来通りの譜代大名を中心とする、幕府政権の強化をはかった。

「隠居急度慎」を命ぜられた春嶽は、江戸霊岸島邸に幽閉され、文久二年（一八六二）四月まで、四年間に及ぶ謹慎生活を送るに至ったが、かわりに幕命によって十七代藩主となったのは、糸魚川藩主松平日向守直廉である。糸魚川松平家（一万石）は、福井四代藩主光通の庶子直堅の流れをくみ、直廉はその九代目当主で、越前松平家相続後、將軍家茂の一字を賜わって「茂昭」と改名した。

茂昭は、重罰を蒙って幽居する養父春嶽を常に尊重し、藩主としては、春嶽の敷いた基本路線を踏襲して、その継統発展に努力した。

㉑ 山内容堂書状 安政五年七月五日付 松平春嶽宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵
この書状は、安政五年（一八五八）七月五日、自己が幕譴を蒙むることを確認した松平春嶽が、それを同志山内容堂に報知したのに対する返書で、日付が七月五日であるところを見ると、同日夜中に両者の間でやりとりされたものと推定される。

共に幕政の大改革を目指して活動し、志ならず敗退した両

者の無念が、行間に溢れている。

〔山内容堂〕

容堂、酔狼、酔漢、鯨海酔侯等と号す。嘉永元年（一八四八）十二月、土佐藩主となり、吉田東洋を抜擢して藩政の改革を行い、公武合体を主唱して活動した。將軍継嗣問題がおこるや、松平春嶽等と連蟄して一橋慶喜を推し、井伊直弼との政争に敗れて謹慎蟹居を命ぜられる。

文久二年（一八六二）政事総裁職となつて幕政改革に乗出した松平春嶽に協力して、朝幕の間を周旋し、徳川慶喜に大政奉還を建言した。明治五年（一八七二）六月、四十六歳で東京に歿す。

松平春嶽とは、生涯を通じ最大の親友として交情を深め共に幕末四賢公の一人に数えられている。

⑳ 躍鯉模様時絵硯箱

福井市春嶽公記念文庫蔵

一具

安政五年（一八五八）七月五日、松平春嶽は幕命によつて隠居急度愼の厳科に処せられた。

春嶽の手足となつて活躍した中根雪江・橋本景岳の二人は、主君が厳罰に処せられた責任をとつて、即日自刃の決意を固めた。しかし、その気配をさとつた春嶽は、二人に親書を与えて慰諭したので、痛く感激した雪江と景岳は、自刃を思い止まり、主君の雪冤と再起のために一層の努力を誓ひあつた。その日春嶽は、近侍の家臣五名に物を賜うて慰労と感謝の意を表したが、景岳の賜つたのが、この硯箱である。引出し内には、春嶽がしのばせた小判二両が、当時のままに収められている。

㉘ 松平春嶽筆 「追思韓子拘幽操云々」の詩幅

鯖江市 福島文右衛門氏蔵

一幅

激動の時流に、真に国家の将来を憂え、真心をもつて対処した松平春嶽は、安政五年（一八五八）七月五日、幕命によつて隠居急度愼の厳科に処せられた。この詩は、その二日後に書かれたもので、幕譴を蒙つた春嶽の心境がよくあらわれている。

㉙ 村田氏寿書状

安政五年七月二十六日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井から江戸の橋本景岳に宛てた書状で、書中、藩内守旧派の動きについて伝えている。

松平春嶽の隠居謹慎にともない、天保・安政期の藩政改革で退けられた松平主馬や天方孫八ら守旧派の活動がみられ、改革派との間に微妙な対立が生じた。

㉚ 村田氏寿書状

安政五年八月十四日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

㉛ 長谷部甚平書状

安政五年十月十九日付 橋本景岳宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

井藩による井伊政権打倒計画についてふれている。

福井藩は、松平春嶽の隠居謹慎により、中央の政治活動から一切手を引かざるを得なくなったが、村田氏寿・長谷部甚平ら藩の一部の間では、武力による井伊政権打倒計画がひそかに練られていた。長谷部甚平の書状によると、玉（天皇）

を盗み、春嶽を福井に迎えて、鯖江間部家の居城や彦根城を焼き払い、前後相応じて京都を鎮護するという、極めて過激なものである。

③② 橋本景岳筆 幕吏の審問に対する応答次第書 安政五年十月二十二日付 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

安政五年（一八五八）十月二十二日、江戸福井藩邸の役宅にいた橋本景岳は、突然幕府役人の取調べを受けた。町奉行石谷因幡守配下の幕府役人は、景岳の役宅を搜索し書類を押収した上、その場で最初の訊問を行い、翌日町奉行所で審問の上、藩邸内瀧勘藏預けの謹慎を命じた。以来景岳は、町奉行所や評定所で七回にわたる取調べを受け、翌六年十月二日入獄・同七日処刑されるに至った。

この史料は、安政五年十月二十二日夜、藩邸内において、幕吏から最初の訊問を受けた際の応答の次第を、景岳自ら筆録したものである。

③③ 「御広敷御日記帳」

越葵文庫蔵

一綴

江戸霊岸島の福井藩別邸に勤務した広敷即ち大奥の老女の日誌である。

井伊直弼との政争に敗れた松平春嶽は、安政五年（一八五八）七月五日、「隠居急度慎」の厳罰に処せられたが、春嶽の動静を極度に警戒した幕閣は、さらに空屋同然となっていた霊岸島邸を急普請して幽居を命じ、十一月十一日、春嶽を新藩主茂昭や大方の重臣達から完全に隔離した。

この日記は、霊岸島邸へ引移る二日前の十一月九日より同月二十二日に至る間が記録され、当時の春嶽の状況を伝える史料として、極めて興味深い。

③④ 橋本景岳書状 安政六年九月二十八日付 母梅尾宛 一通

福井市 加藤二一氏寄託

③⑤ 拝領 麝香包み

福井市春嶽公記念文庫蔵

一包

〔橋本景岳書状（③④）並に拝領麝香包み〕

安政六年（一八五九）九月二十八日、松平春嶽が禁錮幽閉中（刑死十日前）の橋本景岳を慰めるため、与えた麝香である。麝香は、ジャコウ鹿から取った薬品・香料で、非常に芳香が強く、古くより貴重薬として珍重されてきた。

拝領した景岳は、自分では用いず、書状を添えて福井の母（梅尾）へ送った。その添状にあるごとく、藍染めの水玉紙製畳紙は、松平春嶽が包装したもので、布製小袋は景岳の母が製したものである。

③⑥ 松平春嶽手形並に惜別の和歌幅

東京都 中根隆氏寄託

一幅

井伊直弼との政争に敗れた松平春嶽は、安政五年（一八五八）七月、隠居急度慎の処分を受けて江戸霊岸島邸に幽居することとなり、春嶽の手足となって活動した橋本景岳も、翌年十月七日斬刑に処せられた。こうした事態に、春嶽の帷幄の臣中根雪江は、責任を感じて春嶽の側近を離れ、国元福井へ帰らんとした。福井へ発程の前日（安政六年十月十日）、

暇乞いに出向いた雪江に対し、春嶽が机上の手沢品とともに書き与えたのが、この手形と和歌の幅である。

朝夕にこれをなかめてわか前に居るか如くに汝いまし思へよ

③⑦松平春嶽撰・筆 「率由録」・同付属図 二冊五十二葉 越葵文庫蔵

井伊直弼との政争に敗れ「隠居急度慎」の嚴罰を蒙った松平春嶽は、文久二年（一八六二）四月まで、四年間に及ぶ幽居謹慎の生活を送るに至ったが、かわりに幕命によって十七代藩主となったのは、越前家の門流糸魚川藩主の松平茂昭である。茂昭は、養父春嶽を深く景慕し、春嶽の敷いた基本路線を踏襲して、その継承発展に努力した。

安政七年（一八六〇）春、初めて領国越前へ入部することとなった茂昭は、福井藩主としての旅中の心得や、在国中の振舞・作法、様々の留意点等について、養父春嶽に質問した。幽閉中の春嶽は、乏しい資料と抜群の記憶力を駆使してこれに応じ、間もなく一〇三箇條にわたる詳細な心覚えに、付図五十二葉を添えて送ったのが、この書物である。すべて春嶽の自筆であるが、のち茂昭が家臣に浄写させた写本も付属している。なお、「率由」とは「よりしたがう」意である。

③⑧松平春嶽書状 万延元年九月四日付 松平茂昭宛 一通 越葵文庫蔵

將軍繼嗣問題をめぐる政争で、井伊直弼に敗れ、隠居急度慎という嚴罰に処せられた松平春嶽は、万延元年（一八六〇）九月四日、譴責処分の一部を宥免された。その日、春嶽は国元の新藩主松平茂昭にこの書状を認め、宥免を喜ぶとともに

非業の最期をとげた家臣橋本景岳の靈を慰めたい旨、心境を伝えた。当時はまだ、幕命によって処罰された景岳を、藩として表立って回向することができず、それを心苦しく不憫あはれに思った春嶽は、ひそかに近臣萩原金兵衛を通じて、茂昭付の桑山十兵衛へ金子を送り、内々景岳の靈前へ供物をそなえるよう、茂昭に依頼したのである。春嶽の家臣に対する思いやりの深さを示すとともに、景岳を失った愁傷が行間にあふれている。

③⑨三国幽眠筆 「笑草」原本並に刊本 二冊 東京都 三国直福氏寄託

安政大獄に連座した三国幽眠が、京都より江戸へ護送され収監されるまでの経過を記録した獄中日記である。刊本は、幽眠の子三国一怒が、明治二十九年八月に発行した。

第三 政事総裁職在任の時期（文久二年^{一八六〇}～同三年）

万延元年（一八六〇）三月、大老井伊直弼が桜田門外に殺害され、そのあとを受けた幕府閣老は、皇女和宮の降嫁を朝廷に奏請するなど、世態は大きな変動を始めた。文久二年（一八六二）四月、松平春嶽は島津久光の運動などによって謹慎を解かれ、さらに同年六月には、勅使大原重徳が江戸に下向し、一橋慶喜を将軍後見職、春嶽を大老として政治を図らしめよとの勅書をもたらしたことから、同年七月九日、政事総裁職に就任し、一橋慶喜と共に幕政の中心に立つこととなった。

この時期春嶽は、幕府の私政を廃し、一刻も早く將軍自ら上洛して朝廷尊奉の実意を天下に明示しなければならぬと説き、正しい幕府政治のあり方を追求した。

また政事総裁職として、参勤交代制を大幅に緩和するなど幕政の大改革を断行した。

しかし、それも幕府の衰勢を立て直すには既に遅く、尊攘思想の激化などによって、予期した成果を収めることができなかつた。そのため、辞表届け捨てのまま福井へ引きこもり、まもなく逼塞との幕命を受けた。

④松平春嶽拝写 勅書御写 文久二年六月十日 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

江戸霊岸島邸に幽居の生活を続けていた松平春嶽は、文久二年（一八六二）四月二十五日、ようやく一切を赦免する沙汰を受けて、政界へ復帰することとなった。幕府のこの処置は、朝廷を動かし春嶽らの宥免を幕府へ働きかけようとする島津久光の動きを察知して、朝命を仰ぐ前にとられたもので

あった。

やがて、久光に護衛された勅使大原重徳が江戸に到着し（六月七日）、思い切った幕政改革を幕府に迫ったが、この史料は、六月十日大原重徳より將軍家茂に下された勅書の写で、これに感激した春嶽が、自ら原本のままに浄写して大切に保存したものである。

〔包紙上書〕

文久二年壬戌六月十日、以勅使大原左衛門督、大樹公江被仰進候 勅書御写

〔本文〕

一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前前中將ヲ大老トシテ、幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ戎虜ノ慢ヲ受スシテ衆人ノ望ニ協フヘクト、思召候事

④徳川家茂書状 文久二年六月二十七日付 松平春嶽宛 一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

文久二年（一八六二）五月七日以降、政界に復帰した松平春嶽は、それより幕閣に対し、公武の関係を円滑にして、天下一統誰もが納得する国是を早急に決定しなければならぬと繰返し説いた。

しかし、大部分の閣老や幕府有司は積極的な協力態度を示さないばかりか、かえって反発さえする有り様であったから、春嶽は幕政参与としての登壇も、病気を理由に中止することとした。この書状は、そうした春嶽の登壇中止を深く憂慮した將軍家茂が、自筆をもって切々と出勤を促したものである。

この後も春嶽は、しばらく登壇を見合せたが、大久保忠寛を中心とする幕閣有司や、松平容保・島津久光の懇請、勅使

大原重徳の熱意に動かされ、七月九日ついに政事総裁職に就任した。

④②松平春嶽書状 文久二年七月九日付 松平茂昭宛 一通

越葵文庫蔵

国元の茂昭に、政事総裁職就任を報知したものである。

④③徳川慶喜筆 日之出梅花図

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔徳川慶喜〕

徳川十五代将軍。水戸藩主徳川齊昭の第七子。弘化四年（一八四七）三卿の一つ一橋家を継ぐ。幼少より英明の評高く、将軍継嗣として一橋派に擁立されたが、紀伊派の推す慶福（十四代将軍家茂）に敗れ、安政大獄に際して隠居謹慎を命ぜられた。井伊直弼が暗殺されてのち許されて、文久三年（一八六二）に将軍後見職となり、慶応二年（一八六六）、江戸幕府最後の将軍に就任し、仏公使ロッシュの援助を得て、幕府軍を洋式化するなど、強力な改革を断行し、幕政の刷新をはかった。しかし翌年十月、土佐の山内容堂の建白をいれて、大政を奉還し将軍職を辞した。大正二年（一九一三）七十七歳で歿す。

④④横井小楠筆 「斯道在懐云々」の詩幅

一幅

福井市春嶽公記念文庫蔵

〔横井小楠〕

文化六年（一八〇九）に生まれる。熊本藩士。平四郎と称し、小楠・沼山と号す。熊本藩校時習館に学んで、その居寮

長となり、のち江戸に遊学、藤田東湖等に交わり、帰国後藩政改革に参画したが失敗した。また諸国を遊学して吉田松陰・橋本景岳等と会談した。

安政五年（一八五八）松平春嶽に招かれて福井藩の賓客となる。開国通商・殖産興業による富国強兵策を主張、橋本景岳なき後の藩政改革を指導した。文久二年（一八六三）春嶽が政事総裁職につくや、その幕政改革に協力して活躍したが、翌三年福井藩内部の政変で失脚し帰国した。明治元年（一八六八）維新政府に召かれて上京、徴士参与として出仕したが翌二年耶蘇教化共和論者であるとの理由で暗殺された。

④⑤春嶽公記念文庫史料第百弍号

四冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

春嶽公記念文庫史料は、他の文庫史料と区別して保存されてきたものである。史料を収めた茶封筒には、それぞれの史料の内容につき簡単な解説が書込まれているので、ここではその表書のままを左に示した。

文久二年壬戌八月慶永公政事総裁職在職中幕政改革ノ第一トシテ其私政ヲヤムベキコトヲ主張セラレタル意見書

④⑥松平春嶽書状 文久二年八月二十六日付 松平茂昭宛 一通

越葵文庫蔵

文久二年（一八六二）八月二十四日、政事総裁職に就任して一月半の松平春嶽は、幕府閣老の因循に憤激して、この日以降登営を中止した。

この書状は、二日後の二十六日、国元の茂昭に宛てたもので、書中、「諸事我等之建言者一事として総裁職蒙命候以来

不被行、空費日月而已にて奉恐入候云々」とあるなど、この時期の幕府の様子を伝えていて興味深い。

④⑦黒蠟色塗携帶用煙草盆

一具

福井市春嶽公記念文庫蔵

文久二年（一八六二）九月、松平春嶽が十四代將軍家茂より拝領の品で、煙管・火打石・火繩等が在中している。また外箱の蓋に家臣の手で次の由緒書がある。

文久二年九月三日、浜御庭江公方様被為成候節、中將様御同所ニ被為入候而御拝領被遊候御品ニ候間、御大切ニ取扱候様被申聞候事。

④⑧大久保一翁書状 文久二年十月 松平春嶽宛

一通

越葵文庫蔵

〔大久保一翁〕

文化十四年（一八一七）生まれる。幕臣。名は忠寛、越中守を称し、一翁を号す。勝海舟に洋学を学び、老中阿部正弘に見出されて、目付・海防掛・蕃書調所頭取・京都町奉行・外国奉行・大目付・勘定奉行などを歴任した。松平春嶽らと親交を持ち、早くより大政奉還を唱え、徳川慶喜の大政返上後は、勝海舟と共に江戸開城の交渉にあたるなど徳川家の存続に努力した。維新後は静岡県参事、東京府知事、元老院議員を歴任、明治二十一年、七十二歳で歿した。

④⑨青色釉角鉢型筆立

一点

福井市春嶽公記念文庫蔵

箱蓋裏に「慶永様江大久保越中守様より被呈之」とあって、

幕臣大久保一翁が松平春嶽に贈ったものであることが知られる。筆立裏面に、「安政己未」の年号がある。

⑤⑩春嶽公記念文庫史料第百三十号

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

④⑤と同じく、他の文庫史料と区分して保存されてきたものである。

〔封筒表書〕

文久二年幕政改革將軍上洛礼文主義廃止ニ就キ容易ニ実績アガラズ一橋後見職ハ病ト称シテ登城セス勅使ノ江戸着ハ目睫ノ間ニ迫リ幕府ノ要路ノ狼狽セルヲ見テ要ハ幕政改革ノ精神ヲ通シテ其実績ヲアクベキコトヲ高調シ御用部屋ニ差出サレタル政事総裁職松平慶永公ノ意見書草案

⑤⑪金沃懇地湖畔飛鶴図蒔絵印籠

一腰

福井市春嶽公記念文庫蔵

中根雪江の箱書によれば、文久二年（一八六二）十二月、雪江が横井小楠を同伴して江戸尾張藩邸に赴き、政事総裁職在任中の主君松平春嶽の幕政改革策について陳述の際、元尾張藩主徳川慶恕（慶勝）より拝領の印籠である。

⑤⑫御上洛御用掛供奉御行烈附

文久三年二月 紙本木版 一面

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑤⑬「朵雲群集」 鈴木準道製作

一帖

福井市春嶽公記念文庫蔵

旧福井藩士で、維新後も越前松平家の家令を勤め、さらに初代福井市長ともなった鈴木準道が、家令在任中松平春嶽に懇望して集めた維新貴顕の春嶽宛書状を、折本に仕立てたものである。

有栖川宮熾仁親王・鷹司輔熙・岩倉具視・徳川慶喜・山内容堂・鍋島直正・島津久光等、二十七名の春嶽宛書状が収録されている。

〔松平春嶽題辞〕

余駑鈍劣才之身を以、荷天恩旧幕府惣裁職之重任を負担ス、辞職候の後東奔西走為国家ニ一身ヲ抛ちて聊尽力、維新前後不顧不肖周旋尽力す、仍之公卿侯伯往復数百回、其書状を家扶鈴木準道之懇請ニより割愛せり、此書状を觀る者は當時之景況を想像せよ、是を以題辞之代トス
明治十六年三月 正二位勲二等源朝臣慶永書（印）

第四 京都における活動の時期（文久三年一八六三～慶応三年一八六六）

春嶽が福井に引きこもっている間にも、京都の政局は大変動を続けていた。特に薩摩藩を中心とする公武合体派の勢力は、三條実美ら過激派公卿と長州藩を主体とする急進的攘夷討幕派の勢力を駆逐して政情を逆点すべく、ひそかに武力政変を画策、文久三年（一八六三）八月十八日早晩、中川宮朝彦親王・近衛忠熙（近衛）など上級公卿と連絡して、会津・薩摩の兵力を動かし、尊攘激派の公卿を追放し、宮門警固の長州勢を退去させることに成功した（八月十八日の政変）。

こうして、公武合体派勢力の台頭により急転した京都の政局は、再び春嶽の出馬を必要とした。これより春嶽は、朝命により、あるいは幕命により、四度にわたって入京し、京都を舞台として活動することとなった。

この時期の春嶽は、老中による徳川家のための私政を廃し、天下と共に天下を治めるべきであるとして、広く国内の意見を政治に反映させる新しい政治体制の樹立を目指した。しかし、頑迷な幕府要人達は、そうした春嶽の努力を理解しえず、時局は王政復古に向けて推移することとなった。

④ 松平春嶽書状 文久三年四月十四日付 松平茂昭宛 一通

越葵文庫蔵

文久三年（一八六三）三月二十一日、嚴罰を覚悟して京都を辞し、国元に帰って逼塞を命ぜられた松平春嶽は、帰藩して半月後の四月十五日、加賀・小浜の両藩主に使者を派遣し、共に「藩屏の任」を尽すべく、協力を依頼せんとした。

この書状は、その前日茂昭に宛てたもので、使者の心構え等についてふれている。

⑤④ 中根雪江筆 「尚友書屋記」の木板

二枚

福井市春嶽公記念文庫蔵

文久三年（一八六三）六月、自己の上京中に、藩論の大勢を占めるようになっていた「拳藩上洛説」に、飽く迄反対の意見をとっていた中根雪江は、六月七日、横井小楠等上洛推進派と大激論に及び、遂に六月十四日、蟄居・隠居を命ぜられ、謹慎生活を送るに至った。

この「尚友書屋記」の木板は、謹慎中の雪江の動静を示す珍しい史料で、表面には、「尚友書屋記」と題する雪江自筆の一文が墨書され、裏面は一七四名に及ぶ人名が、同じく雪江の筆で列記されている。

これによれば、蟄居を命ぜられた雪江が、それまで春嶽の股肱の臣として活躍した二十数年の内に、知己となった全国人士の膨大な関係私蔵書類を整理し、機密のものは火中に投じ、平易無害のものを残して、幽閉中の自室の四壁に張付け朝夕これと対座し得るようにし、その居室を「尚友書屋」と名付けたというもので、裏面の名列は、四壁に張りめぐらした墨蹟の筆者達である。これにより、当時の雪江の交際範囲が如何に多岐にわたっていたかが理解される。

⑤⑤ 「文久三亥雜記」

一冊

松平文庫（松平宗紀氏蔵
福井県立図書館保管）

福井藩の手で収集された情報録で、文久三年（一八六三）当時の社会情勢を知る上で重要である。

⑤⑥ 松平春嶽筆 「虎豹変革備考」

一冊

福井市春嶽公記念文庫蔵

松平春嶽が幕府閣老へ示す目的をもって起草したものとと思われる自筆の建白草稿で、春嶽の会議政治論として重要な論述である。記述の時期は、文久三年（一八六三）末ごろのもので推定される。

文久二年四月、謹慎幽居の生活から解放された春嶽は、それ以後盛んに「幕私」を去って天下の「公論」に従うべしと主張し、天下公共の意見を反映し得る新しい政治体制を確立せんとした。そのため、早くより全国諸藩の英知を結集した雄藩連合政権の樹立をよびかけ、公議會制の構想を打出し、他に先駆けて大政奉還の必要をも主張した。しかし、そうした春嶽の活動は、幕府の権威を失墜する危険思想であるとして、大方の幕府幹部の反感をかった。

この「虎豹変革備考」は、そのような春嶽の政治理想が具体的に記されたもので、ことに上院・下院よりなる二院制公議會議は、他に比較してきわめて早い時期に属するものとして注目される。

⑤⑦ 京都御郭内之図

文久三年冬京都平野屋茂兵衛刻 紙本木版

一面

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑤⑧ 「告示」

文久四年二月 （稲葉家旧蔵史料） 一綴

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井藩の上級武士稲葉家旧蔵の文書。藩主松平茂昭・前藩主松平春嶽の連名で家臣にあてた諭告で、前途多難な時局に対処すべき福井藩士の心構えを説いたものである。

⑥0 元治改元年号折紙

一紙

福井市春嶽公記念文庫蔵

この折紙は、文久四年（一八六四）三月一日、大目付溝口直清を通じて、改元のことを正式に回達された際のものである。

松平春嶽の史論『逸事史補』中には、文久四年二月、年号を改めるに際して、春嶽が朝幕の間を周旋し、無事「元治」と改元したことを伝える秘話が記録されている。

⑥1 村田氏寿受傷の弾丸・由緒書

二点

東京都 村田正典氏寄託

元治元年（一八六四）七月の禁門の変（いわゆる蛤御門の変）の際、福井藩兵は京都御所堺町御門を警備していたが、これを指揮していた村田氏寿が負傷、体内から摘出したものである。

⑥2 鈴木準道筆 「長防征伐略記」

元治元年

一冊

松平文庫（松平宗紀氏蔵）
福井県立図書館保管

第一次長州征伐で福井藩は、藩主松平茂昭が征長副総督を拝命し、元治元年（一八六四）八月から翌慶応元年三月まで前後八ヶ月の長期にわたって軍役を負担した。

この「長防征伐略記」は、御小姓鈴木拾五郎（準道）の従軍記で、福井藩の出兵について記された「征長出陣記」・「長州征伐小倉陣中日記」・「征長御供日記」などと共に、重要な史料となっている。

⑥3 毛受 洪筆 「雲務秘録」

一綴

本館蔵

慶応元年（一八六五）閏五月四日、藩命により上京した毛受洪は、長州再征問題の推移を見極め、自藩が対処すべき方向を見定めるため、同年九月下旬まで滞京して活躍した。この日記は、その際の日録で閏五月五日より同年九月二十六日までが記録されている。『続再夢紀事』等の編纂にも利用されていない貴重史料である。

〔毛受 洪〕

文政八年（一八二五）七月、福井藩士毛受福高の嫡男として生まれた。名は寛洪、通称を鹿之介といい、広く知られる。『洪』の称は、後年主君松平春嶽より拝賜したものである。

安政元年（一八五四）正月、ペリーの再来航に備え、藩命により江戸に上って白備指揮頭を勤め、大砲方や藩校明道館の教官に任じ、同六年三十五歳で家督を相続した。文久二年（一八六二）松平春嶽の政界復帰と共に、その信任を受け、側用人等の重職を歴任しつつ、多く京阪の地にあつて朝・幕・諸藩の間を周旋奔走し、諸方面からその見識と才腕を認められた。

王政復古と共に新政府の参与を拝命し、明治二年には東京に招致されて集議院幹事を勤めたが、翌年冬一切の公職を退いて帰郷、禄を離れた旧藩士救済のため活動した。

明治三十三年四月、七十六歳で歿す。

⑥4 松平春嶽書状 慶応二年八月十三日付 松平茂昭宛 一通

越葵文庫蔵

慶応二年（一八六六）六月、長州再征を強行した幕府軍は長州勢必死の防戦の前に、殆ど連戦連敗し、七月には、將軍

家茂が大坂城に於いて病歿するという、幕府にとっての非常事態に直面した。

この書状は、征長即時停戦を強く主張してきた松平春嶽が京阪の地にあつて時局の收拾に必死の努力を傾けていた時のものである。

⑥5 松平春嶽筆 「登・滞京日記」 「京都日記」 十冊

〔登・滞京日記〕

福井市春嶽公記念文庫蔵

慶応三年（一八六七）三月二十四日、朝廷より上京を命ぜられた松平春嶽は、四月十二日福井を出発、京都において山内容堂・伊達宗城・島津久光とともに、長防の処置・兵庫開港問題等について討議、八月六日まで滞京して福井へ帰国した。これは、その際の詳細な日記で、同年四月十二日から六月一日までが記録されている。

〔京都日記〕

「登・滞京日記」と同じ慶応三年（一八六七）四月から八月にかけての上京中の日記である。第五号から第十号まで六綴が現存し、同年五月二十一日より帰国直前の八月四日までが筆録されている。「登・滞京日記」と記録時期が重複するのは、両日記の執筆目的が相違するからで、驚くべきことに当時春嶽は丹念に連日二種の日記をつけていた。すなわち「登・滞京日記」は、政治的秘事項まで詳細に記録した他見を許さぬ自己かぎりの秘記であり、「京都日記」の方は、京都における日常を夫人勇姫に伝えるために記録した京都滞在記なのである。

⑥6 四老公肖像写真衝立

福井市春嶽公記念文庫蔵

一基

かねて英明の誉高ほまれかつた徳川慶喜は、慶応二年（一八六六）十二月、十五代將軍に就任するや、天下の耳目を一新するよう幕政改革を次々と断行し、その非凡な才能を発揮した。慶喜の強力な幕政刷新を目にした倒幕派雄藩は、大いに警戒心を深め、とくに薩摩の小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通らは、岩倉具視と連繋し、当時政界に強い影響を及ぼし得る、松平春嶽・山内容堂・伊達宗城・島津久光の四人（いずれも隠居などの立場にあり、老公と称された）を、朝命をもって京都に集め、時局打開策を協議せしめて主導権を掌握し、幕府の新体制を圧迫せんとはかった。

こうして、慶応三年五月朝命を拝して京都に会同した四侯は、数回の会議を開き、政局について協議したが、相互に立場の相違があるなどして、一致の決論を見出すことは困難で、めざましい成果をあげることは出来なかった。

その間の五月十四日、將軍慶喜は上京した四侯を慰労するため、二條城に招いて饗応し、写真師横田彦兵衛を召して、記念のため四人を撮影させたのが、この写真であり、写真師が彩色を施している。

後日、四葉の写真を押領した春嶽は、それを紫檀製の小衝立に仕立てさせ、自ら裏書や四侯の略歴を付記して後世に伝えた。四侯の肖像を比較すると、それぞれ史上に伝えられる通りの人柄がよく表れていて、興味のつきないものがある。

⑥7 洋式軍装馬具

一具

福井市春嶽公記念文庫蔵

幕末の仏公使ロッシュが、十五代将軍徳川慶喜に献上したフランス製馬具である。

慶応三年（一八六七）八月四日、松平春嶽は徳川慶喜から「兵庫開港につき尽力を感謝す」として、純金鎖付懐中時計とともにこの馬具を拝領した。

当時フランスは、英国の対日政策に対抗して、幕府援助策を推進していたが、この馬具は、そうしたフランスと幕府の関係を示すものとしても興味深い。

⑥⑧ 泉春園筆 雅楽図・土佐備前守筆 支那武人図の扇子 二握

福井市春嶽公記念文庫蔵
松平春嶽が明治天皇より拝領の扇子である。

〔松平春嶽自筆箱書〕

慶応三年丁卯八月五日御暇参内之節、御狩衣ニ御添拝領。

⑥⑨ 酒井十之丞筆 「心志録日記」

一綴

福井市春嶽公記念文庫蔵

福井藩士酒井十之丞が、文久三年（一八六三）七・八月、藩命を帯びて熊本・薩摩両藩へ旅した際の旅中日記である。酒井十之丞は、名を忠温、号を帰耕といい、禄八百二〇石を食んだ上級藩士である。万延元年（一八六〇）四十二歳の時、側用人見習に任じ、翌文久元年同本役、慶応二年（一八六六）には中老に昇進した。文久元年以降は、中根雪江等と共に主として京阪の地にあつて、朝廷・幕府・諸雄藩の間を周旋奔走し、貴顕の知遇を得、諸有志の信望をあつめた。また、王政復古直後、同藩の中根雪江・毛受洪と共に、維新政府の参与に任ぜられ、新政に参画した。

この日記は、文久三年六月中旬、挙藩上洛して活動することとで、一旦藩論をまとめた福井藩が、全君臣挙げて京師に活動するにしても、一藩でよりも、有力大藩と同心協力した方が、はるかに成果が上がると考え、家老岡部豊後、側用人酒井十之丞、郡奉行在任中の三岡八郎（由利公正）の三人を使者とし、春嶽公の直書を携えさせて、同年七月五日、熊本及び鹿児島へ出発させた際のものである。

第五 新政参画の時期（慶応三年^{一八六六}〜明治三年^{一八七〇}）

慶応三年十月十四日、徳川慶喜が大政奉還の上表にふみ切ったのを知った松平春嶽は、同年十一月八日、五度目の入京をした。これより明治三年七月に至る二カ年余は、新政府に参画した春嶽が、公職にあつて最後の活動をした時期である。この間、慶応三年十二月九日、王政復古の大号令と同時に新政府の議定職に任せられ、のち内国事務総督、内国事務局卿、民部官知事、民部卿、大蔵卿（兼任）、大学別当兼侍読にと、それぞれ任命された春嶽は、議会政治の早期実現と、徳川氏救済に身命をかけた。

しかし、徳川慶喜を締め出したかたちでの新政治体制の中にあつては、歴代將軍と濃密な関係にあるその血筋からして、ともすれば幕府政権維持を主張する佐幕の大名と理解されがちであり、苦しい立場にあつた。

それでも、この時期、新政府と旧幕府との調停の労をとり極力内乱の勃発を避けるべく努力した春嶽の功績は、非常に大きなものがあつた。

⑦⑩ 松平春嶽筆 「滞京日記」

十一冊

福井市春嶽公記念文庫蔵
慶応三年十月中旬、朝廷・幕府より上京の命を受けた松平春嶽は、十一月二日福井を出発同八日京都に到着した。この間、徳川慶喜は大政を奉還し、情勢は大きく転換しつつあつた。京到着の翌日、議定職に認められた春嶽は、国事に奔走するとともに、徳川宗家の存続を願つて憂慮一方ならぬものがあつた。これは、その間慶応三年十一月二日から翌四年二月二十日に至る詳細な日記である。

⑦⑪ 岩倉具視書状 慶応三年・同四年 松平春嶽宛 四通

福井市春嶽公記念文庫蔵

松平春嶽宛の岩倉具視書状五通と、春嶽の添書を合装したものである。軸裏に春嶽の筆で、「前右大臣贈太政大臣従一位大勲位岩倉具視公真筆書翰 春嶽松平慶永珍藏」と書付けられている。

〔松平春嶽由緒書〕

皇政維新之際、岩倉公と屢往復する書翰なり。当時之景況を想像するに足れり。今度岩倉具綱・同具定両君江照会し、真筆之鑑定を請ふ所、無相違「真筆也」と垂示されたり。ゆへに一幅として、子孫ニ伝ふ。

明治十七年七月

春嶽松平慶永（印）

〔岩倉具視〕

文政八年（一八二五）九月、権中納言堀河康親の次男として京都に生まれた。名は具視、対岳と号した。安政五年（一八五八）通商條約勅許問題では幕府と対立したが、公武合体策に力を入れ、皇女和宮降嫁に尽力した。しかし、このことが、尊攘派の廷臣から憎悪を受け、蟄居・落飾を命ぜられて洛北岩倉村に幽居した。慶応三年（一八六七）入洛を許され、中山忠能・大久保利通らと討幕計画を練り、「王政復古の大号令」の発布を実現せしめた。維新後は参予、ついで議定の要職に就き、三條実美とともに副総裁、明治四年（一八七二）右大臣・特命全權大使を拝命して、木戸孝允・大久保利通らを副使として欧米を視察した。帰朝後は、征韓論を阻止し、その他、皇室制度・立憲制度の創設にも功績を残したが、明治二十三年（一八九〇）五十九歳で歿した。

⑦②松平春嶽書状 慶応三年十二月十一日・同十四日付 松平茂昭宛 二通

越葵文庫蔵

この書状は、王政復古の头号令発布直後、ほとんど不眠不休の活動を続ける松平春嶽が、京都の状況を国元の茂昭に報知したもので、急転する時局に混乱する宮中の模様を伝え、諸藩要人に対する寸評なども見えて、誠に重要である。

⑦③各種新聞 中外新聞第一冊（慶応四年）・内外新聞（慶応四年）・万国新聞紙第一冊（慶応三年）・もしほ草第一冊（慶応四年） 四綴

松平文庫（松平宗紀氏蔵）
福井県立図書館保官

表紙に「越国文庫」・「凶書寮」の印と共に、松平春嶽所用の丁字印が押されている。

春嶽が当時、熱心に国内・外の知識と情報の吸収につとめていたことを示す資料として、興味深い。

⑦④勝 海舟書状 慶応四年正月 松平春嶽宛 一通

越葵文庫蔵

慶応三年（一八六七）十月、徳川慶喜が政権を返上し、十二月には「王政復古の头号令」が発せられたが、翌年正月、「鳥羽伏見の戦」の勃発によって、松平春嶽の時局匡救・徳川宗家救解の運動は、すべて水泡に帰し、時局は江戸城総攻撃へと急転することとなった。

この書状は、そうした昏迷と惑乱の渦中に身を置いた勝海舟が、信頼する松平春嶽へ宛てたもので、諸外国の介入や国内の混乱を深く憂慮した海舟の心境をよく伝えている。

〔勝 海舟〕

文政六年（一八二三）一月旗本勝小吉の長男として生まれた。名は義邦、のち安芳、通称麟太郎、海舟・飛川と号した。剣術を島田虎之助に、蘭学を永井青崖に学び、その間十六歳で家督を継いで、貧窮の中に苦学した。嘉永三年（一八五〇）蘭学塾を開いて西洋兵学を講じ、ペリー来航では、海防意見書を幕府に提出して頭角を現わした。安政二年（一八五五）蕃書翻訳御用を命ぜられ、蕃書調所創設に尽力した。万延元年（一八六〇）には、咸臨丸を指揮して渡米し、帰国後は、その功績によって軍艦奉行並、同奉行に任ぜられた。以後幕府の中核となって活躍し、長州征伐の始末、徳川家の救済、江戸城無血開城など大きな功績があった。維新後、新政府の外務大丞・兵部大丞・海軍大輔・参議・元老院議官の要職高官にあつたが、晩年は最ら著述活動に専念し、『海軍歴史』『陸軍歴史』『吹塵録』『開国起源』等を著わした。明治三十二年（一八九九）七十七歳で歿した。

⑦⑤勝海舟筆 「戊辰晩春東台懷詠」の詩 一幅

福井市 水野真男氏寄託

⑦⑥由利公正筆 五ヶ條御誓文の書幅 一幅

福井市 水島直文氏寄託

〔由利公正〕
文政十二年（一八二九）十一月十一日、福井毛矢町で、福井藩士三岡次郎大夫義和、幾久夫妻の子として生まれた。幼名義由、通称を石五郎といった。嘉永四年（一八五一）二十三歳の時、熊本から福井へ来た横井小楠の講義を聞き感激し

その教えを受けた。橋本景岳とも親交があり、福井藩政の改革に努力した。

文久二年（一八六二）郡奉行に抜擢され、名を八郎と改めた。翌年横井小楠が解任された際、三岡八郎も幽閉蟄居を命ぜられた。その間慶応三年（一八六七）には坂本龍馬が来福し、三岡八郎と会見している。同十二月坂本龍馬の生前の進言により、新政府の参与に登用され、御用金穀取扱方となり金札の発行など一年余にわたって新政府の財政の危機を救い翌年三月、五箇條御誓文の起草にあたった。間もなく明治と改元、名を公正と改めた。しかし金札の価値下落で流通の困難が起り、明治二年（一八六九）会計御用掛を辞任し福井へ戻り藩政に参画、明治三年、姓を由利と改めた。

明治四年東京府知事に任命され、翌年岩倉具視に随行し渡欧。外遊中明治五年十二月、府知事免官、明治八年（一八七五）元老院議員、明治二十三年（一八九〇）貴族院議員などを歴任し、明治四十二年（一九〇九）四月二十八日、八十一歳で歿した。

⑦五箇條御誓文草案 複製

五箇條御誓文は、まず由利公正によって次の様な原案が作成された。

本館蔵

議事の体大意

- 一 庶民志を遂げ、人心をして倦まざらしむるを欲す
- 一 士民心を一にして、盛に経綸を行ふを要す
- 一 知識を世界に求め、広く皇基を振起すべし
- 一 貢士期限を以て賢才に譲るべし

この原案は、福岡孝弟^{ひらたか}によって次の様に加筆訂正された。

會盟

- 一 万機公論に決して、私に論ずるなかれ
- 一 諸侯会盟之御趣意、右等之筋ニ可被仰出哉。
- 一 列侯會議を興し、万機公論に決すべし
- 一 官武一途庶民に至る迄、各志を遂げ人心をして倦まざらしむるを欲す
- 一 上下心を一にし盛に経綸を行ふべし
- 一 知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし
- 一 徴士期限を以て賢才に譲るべし
- 一 右等之御趣旨可被仰出哉、且右会盟相立候処にて、大赦之令可被仰出哉
- 一 列侯会盟ノ式
- 一 列藩巡見ノ式

さらに、木戸孝允によって訂正され、慶応四年三月十四日、次の五事が神前で誓約された。

- 一 広く會議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ、盛ニ経綸ヲ行フベシ
- 一 官武一途庶民ニ至ルマデ、各志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス
- 一 旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ
- 一 知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ
- 一 我国未曾有ノ変革ヲ為サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立テントス、衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

⑧太政官札 金拾両・金壹分

二点

⑦⑨ 「会津征討出兵記」・同付録

四綴

福井市春嶽公記念文庫蔵

中根雪江編纂の戊辰日記・武田三十郎の武田日記・村田氏寿の村田日記・松平春嶽の北越事件・粕谷沙庭の粕谷記録など、松平家関係の史料をもとに編修した、福井藩中心の記録。付録二綴は「賞罰之部」「雑之部」にわかれ、関係書翰、文書集である。

⑧⑩ 松平春嶽・同茂昭褒賞状 年不詳五月 栃屋政之助宛 一通

笹生常太郎氏寄託

松平春嶽・同茂昭連名の褒賞状で、会津征討に功績のあった藩士栃屋政之助（大御番、一五〇石）に与えられたものである。

福井藩は、慶応四年五月二十二日、会津征討のため越後口への出兵を命ぜられ、軍事総管に酒井孫四郎、参謀に堤五市郎、軍監には市村勘右衛門を任じ、同年六月から十一月にかけて征討作戦に加わった。

⑧① 勅書 「任民部卿」（明治二年七月八日付）・「任大学别当」

「兼任侍読」（明治二年八月二十四日付） 松平春嶽宛

三通

福井市春嶽公記念文庫蔵

⑧② 中根雪江筆 皇恩奉謝の詩歌

一紙

福井市 原 多文氏蔵

この詩並に和歌は、明治二年九月二十六日付を以て、皇道復古の勲功を賞せられ、永世祿四百石下賜の皇恩に浴した感激をうたったものである。「已に簪纓を擲ち、蓑笠に換ふ」の一句は、当時の雪江の境涯を最もよく表わしている。

⑧③ 諭動機

一点

越葵文庫蔵

箱表に「明治三庚午四月、フルベッキ献上」とあり、フルベッキが大学別当時代の松平春嶽に献上したものである。フルベッキ（一八三〇～九八）はオランダで生まれ、のちアメリカで神学を修め、安政六年（一八五九）長崎に来てキリスト教伝道と英学の教育にたずさわった。明治二年（一八六九）東京に招かれ、開成学校（のち大学南校）の運営に協力し、あるいは政府顧問として翻訳・法律制度の調査に携わるなど活躍、大学別当在任中の春嶽とも親しく交際した。諭動機とは、太陽・地球・月の運行を理解させるための教育器具で、中央に灯火をとりし、反射鏡を太陽に見たてて、月（銀の小玉）の満欠や地球に四季のおとずれる様子を教えたものである。

⑧④ プレーサー・ガロー書状 明治三年五月二十日付 松平春嶽宛

一通

福井市春嶽公記念文庫蔵

大学別当の職にあつて、わが国の教育行政を担当していた松平春嶽が、フランス科学者に対して問合せた地震対策に関する珍しい回答書である。

⑤ 徳川慶喜筆 西洋雪景色の図 油彩 一額

福井市春嶽公記念文庫蔵

十五代將軍徳川慶喜の多芸多才ぶりを示す、珍しい油絵である。外国雑誌の挿絵などを参考に描いたものであるうか。春嶽筆の左記英文額裏書によれば、明治三年春の作である。

「It is the picture, which Sir Keiki [] Tocugawa sent by picturing himself, at last spring of third year of Meiji.」

編集担当者

編集
解説集

嘱託 伴 五十嗣郎

学芸員 西村 英之

” 足立尚計

デザイン 主事 山本 喜代美

庶務 副主幹 平 弦月

主査 長谷川 文枝

幕末維新史料展

—— 福井藩その活動の記録 ——

発行 昭和 六十年 十月

編集 福井市立郷土歴史博物館

〒⁹¹⁰ 福井市足羽一丁目八番一六号

電話(〇七七六)三五二八四五

